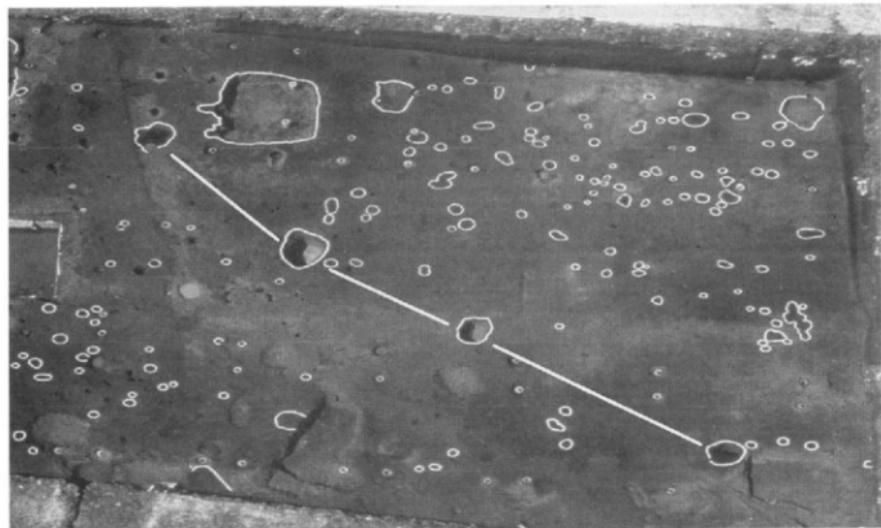


麦野B遺跡

—第3次・第4次発掘調査報告—



1998

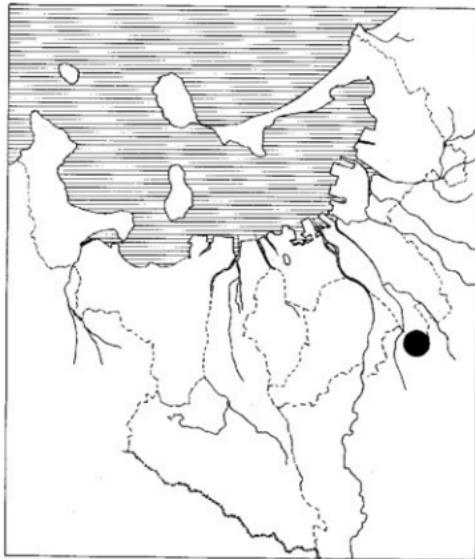
福岡市教育委員会

麦野B遺跡 正誤表

頁	行	誤	正
16	Fig. 14	(遺物番号が落ちている)	SB-01が78 SB-02が79
31	遺物番号3	25-8	25-9
31	遺物番号11	25-9	25-8
38	7	以上の4点は、	以上の5点は、
38	8	このうち6は	このうち8は
40	17	先頭器を含んで	尖頭器を含んで
P L. 5		(1) SK-03(北東から)	(1) SK-08(北東から)
P L. 5		(2) SK-08(北から)	(2) SK-03(北から)
P L. 5		(3) SK-07(北から)	(3) SK-03(南から)
P L. 5		(4) SK-04(南西から)	(4) SK-07(北東から)

麦野B遺跡

—第3次・第4次発掘調査報告—



遺跡略号 MGB-3

MGB-4

調査番号 9613

9661

1998

福岡市教育委員会



出土石器

序 文

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、国内外において重要な地域として多くの人に知られています。

近年、市内南郊においては再開発が急速に進み、発掘調査の件数が増えつつあります。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努め後世に残そうと考えています。

本書は麦野B遺跡群第3次調査、第4次調査の成果を報告するものです。調査の結果、旧石器時代から中世にかけての遺構、遺物が発見されました。

本書が埋蔵文化財の保護と知識を高める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の発刊に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜り、心から謝意を表す次第であります。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

例　　言

1. 本書は、1996年度に福岡市教育委員会が調査を実施した麦野B遺跡群第3次（市民局地域振興部地域振興課）調査、第4次（住宅・都市整備公団）調査の報告書である。調査の担当は加藤謙也である。
2. 本書に使用した遺構の実測は天野玄普、石塚正芳、内村洋一、小田征志、加集寛隆、金尾伸之介、黒岩敬太、佐々木美帆、清水耕平、土器屋剛、端野晋平、馬場賢治、日林強、平川朋和、村崎育宏、柳谷美佳、北村幸子、加藤が、遺物の実測図は田中克子、入江のり子、加藤が行った。製図は田中、入江、加藤が行った。使用した遺構、遺物の写真は加藤が撮影した。
3. 本書で用いる方位は全て磁北である。遺構の呼称は記号化し竪穴住居をS C、掘立柱建物をS B、土坑をS K、溝をS D、柱穴をS Pとした。
4. 旧石器時代遺物においては吉留秀敏の協力を得た。他の執筆、編集は加藤が行った。
5. 本報告に係るすべての出土遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9613		遺跡略号	MGB-3		
調査地地番	博多区南本町2丁目3番					
開発面積	5,700m ²	調査対象面積	5,700m ²	調査実施面積	4,068m ²	
調査期間	1996年6月3日～1997年3月31日					

遺跡調査番号	9661		遺跡略号	MGB-4		
調査地地番	博多区南本町2丁目4番2外2筆					
開発面積	507.85m ²	調査対象面積	507.85m ²	調査実施面積	269m ²	
調査期間	1997年1月27日～1997年3月31日					

麦野A、B、C遺跡群は、調査次数が混乱しており今回調査次数の整理を行った。

麦野遺跡群調査次数訂正一覧

調査番号	遺跡名(新)	調査次数	遺跡番号	遺跡名(旧)	調査次数	遺跡略号	調査原因	検査期間	担当者	報告書
8232	麦野A遺跡	1	MGA	麦野遺跡群	1	MGA	公民館建設	820921～830526	力武・大庭	107
8337	麦野A遺跡	2	MGA	麦野遺跡群	2	MGA	駐車場建設	830715～830723	山崎・田中	未
9116	麦野A遺跡	3	MGA	麦野A遺跡	4	MGA	共同住宅建設	910709～910810	大庭	275
9316	麦野A遺跡	4	MGA	麦野A遺跡	3	MGA	事務所兼自宅建	930616～930624	山口・菅波	409
9412	麦野A遺跡	5	MGA	麦野A遺跡	4	MGA	共同住宅建設	940408～940415	佐藤	未
8520	麦野B遺跡	1	MGB	麦野遺跡群	3	MGA	公園建設	851002～851115	松村	164
9257	麦野B遺跡	2	MGB	麦野B遺跡	3	MGB	パチンコ店建設	930215～930409	佐藤	358
8949	麦野C遺跡	1	MGC	麦野C遺跡	1	MGG	共同住宅建設	891011～891118	小畠	361
8904	麦野C遺跡	2	MGC	麦野B遺跡	1	MGG	事業所建設	890411～890412	佐藤	未
9604	麦野C遺跡	3	MGC	麦野C遺跡	2	MGC	病院兼自宅建設	960408～960419	宮井	501

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 第3次調査	
Iはじめに	
調査に至る経緯	3
調査組織	3
II調査の記録	
1 調査の概要	4
1. 堅穴住居	5
2. 掘立柱建物	16
3. 土坑	17
4. 落し穴	26
5. 小結	28
2 旧石器時代の調査	29
1. 調査の概要	29
2. 旧石器時代の遺構と遺物	29
1) 遺跡の立地と出土状態	29
2) 基本的層位と出土層	32
3) 出土遺物	34
3.まとめ	40
第3章 第4次調査	
Iはじめに	
調査に至る経緯	41
調査組織	41
II調査の記録	
1 調査の概要	43
1. 堅穴住居	43
2. 溝	44
3. 土坑	44
4. 柱穴	44
2まとめ	44
第4章 麦野B遺跡の自然科学分析	ナリノ・サーヴェイ株式会社 45

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/2,500)	2
Fig. 2 第3次調査地点位置図(1/1,000)	3
Fig. 3 第3次調査遺構配置図(1/300)	折り込み
Fig. 4 SC-01実測図(1/40、1/80)	6
Fig. 5 SC-01出土遺物実測図(1/3)	7
Fig. 6 SC-02実測図(1/40、1/80)	8
Fig. 7 SC-02出土遺物実測図(1/3、1/2)	9
Fig. 8 SC-03実測図(1/40、1/80)	10
Fig. 9 SC-03出土遺物実測図(1/3、1/2)	11
Fig. 10 SC-04実測図(1/40、1/80)	12

Fig.11	S C - 0 5 実測図(1/40)	13
Fig.12	S C - 0 4, 0 5 出土遺物実測図(1/3)	14
Fig.13	掘立柱建物実測図(1/60)	15
Fig.14	掘立柱建物出土遺物(1/3)	16
Fig.15	土坑(S K) 実測図1(1/40)	18
Fig.16	土坑(S K) 実測図2(1/40)	19
Fig.17	土坑(S K) 実測図3(1/40)	20
Fig.18	土坑(S K) 実測図4(1/40)	21
Fig.19	土坑(S K) 出土遺物実測図1(1/3、1/4)	22
Fig.20	土坑(S K) 出土遺物実測図2(1/3)	23
Fig.21	落し穴配置図(1/400)	26
Fig.22	落し穴実測図(1/40)	27
Fig.23	石器出土位置図(1/300)	30
Fig.24	ナイフ形石器(1/1)	33
Fig.25	台形石器(1/1)	34
Fig.26	削器(1/1)	35
Fig.27	剥片類(1)(1/1)	36
Fig.28	剥片類(2)他(1/1)	37
Fig.29	麦野遺跡群と周辺の旧石器時代遺物出土地点(1/20,000)	39
Fig.30	第4次調査地点位置図(1/1,000)	41
Fig.31	第4次調査構造配置図(1/160)	42
Fig.32	S C - 0 1 実測図(1/40)	43

図 版 目 次

P L. 1	(1)麦野B遺跡群第3次調査区北半全景(南から)
	(2)麦野B遺跡群第3次調査区南半全景(北から)
P L. 2	(1)S C - 0 1 (西から) (2)S C - 0 2 (東から)
P L. 3	(1)S C - 0 3 (東から) (2)S C - 0 4 (北東から)
P L. 4	(1)S C - 0 5 (北東から) (2)S K - 1 1 (東から)
P L. 5	(1)S K - 0 8 (北から) (2)S K - 0 3 (北東から)
	(3)S K - 0 4 (南西から) (4)S K - 0 7 (北から)
P L. 6	麦野B遺跡群第3次調査出土石器1
P L. 7	麦野B遺跡群第3次調査出土石器2
P L. 8	(1)麦野B遺跡群第4次調査区全景(南から)
	(2)S C - 0 1 完掘状況(南から)

本文写真目次

P h. 1	現地説明会風景	4
P h. 2	旧石器時代調査作業風景	29
P h. 3	石器出土地点状況	32

表 目 次

表1	出土石器観察表	31
表2	麦野遺跡群と周辺出土の旧石器時代遺物	39

第1章 遺跡の位置と環境

(1) 地形

麦野B遺跡群は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積段丘、中位段丘上に位置し、東を大野城市、西を春日市に挟まれ福岡市行政域の最南部にあたる。現在この地域は市街地化が進み、旧地形を窺い知ることはできないが、戦前の地形図などを見ると、以前は多くの開析谷があり複雑な地形をなしていたことがわかる。中位段丘上の、開析によって北に向かって三叉状に開く台地を三分し、西から南八幡遺跡群、麦野B遺跡群、麦野C遺跡群、麦野B遺跡群とC遺跡群の間から北西に伸びる丘陵を麦野A遺跡群と呼称している。

(2) 周辺の遺跡

麦野A遺跡群では過去5次にわたる発掘調査が行われており、第1次調査では15・16世紀の集落、3次調査では7・8世紀の集落、中世前半の掘立柱建物、土坑、土壙墓、4次調査では奈良時代の堅穴住居が検出されている。

麦野B遺跡群では過去2次の調査がなされ、第1次調査では8世紀の井戸、第2次調査では8世紀の堅穴住居、掘立柱建物が検出されている。

麦野C遺跡群では過去4次にわたる調査がなされ、主に8世紀の堅穴住居、掘立柱建物による集落遺跡が検出されている。また、第1次調査では旧石器時代の石器も出土している。

南八幡遺跡群では過去6次の調査がなされ、第1次調査では古墳時代の溝、第2・3次調査では6・8世紀の集落、第4次調査では古代から中世にかけての掘立柱建物群が検出されている。第5次調査では弥生時代後期の堅穴住居がみつかっており、第6次調査地点では8世紀代の集落以外に、落し穴遺構が2基検出されている。

台地の北東側の沖積平野に位置する井相田C遺跡では8世紀前半から9世紀前半にかけての主に掘立柱建物から構成される集落が検出され、大溝から墨書き土器、人面墨書き土器が出土している。井相田C遺跡の南側には仲島遺跡が広がり、奈良時代の井戸が検出され、舞笠川の氾濫原からも人面墨書き土器が出土している。

麦野A遺跡群北側の低位段丘上には高畠遺跡が位置する。大溝から大量の土器、瓦類の他、墨書き土器、木簡、祭祀遺物が出土している。

福岡平野のこの地域に人間の活動がみとめられるのは旧石器時代にさかのぼる。麦野C遺跡、南八幡遺跡、三筑遺跡、井相田C遺跡などではナイフ形石器、台形石器などが出土している。

最近周辺の調査では落し穴遺構が複数みつかっており、この地の複雑な地形を利用して狩猟活動をおこなったことが窺い知られる。

御笠川と那珂川に挟まれた牛頭山麓から北に伸びる洪積台地一帯は、「奴国」の中心とされる須玖岡本遺跡、須玖永田遺跡、須玖唐梨遺跡、板付遺跡、那珂遺跡、比恵遺跡といった弥生時代を代表する集落・生産・埋葬遺跡が濃密に分布しているが、麦野周辺遺跡での弥生時代・古墳時代の遺構はたいへん希薄である。

奈良時代には、北側に高畠庵寺が建立され、東側と西側には大宰府からの官道がはしる。この時代の遺構は周辺遺跡で普遍的にみられるが堅穴住居と掘立柱建物による集落で、その分布範囲はたいへん広い。



- A. 那珂遺跡群 B. 板付遺跡群 C. 諸岡B遺跡群 D. 諸岡A遺跡群 E. 井尻B遺跡群
 F. 南八幡遺跡群 G. 麦野B遺跡群（今回調査） H. 麦野A遺跡群 I. 麦野C遺跡群
 J. 井相田B遺跡群 K. 井相田A遺跡群 L. 仲島遺跡群 M. 比恵尻遺跡 N. 柳町遺跡
 O. 黒田遺跡 P. 天神面遺跡 Q. 須玖唐梨遺跡 R. 智者ヶ本遺跡 S. 須玖五反田遺跡
 T. 須玖永田遺跡 U. タカウタ遺跡 V. 須玖坂本遺跡 W. 須玖花尾町遺跡 X. 須玖岡本遺跡
 Y. 八反ヶ坪遺跡

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 第3次調査

はじめに

調査に至る経緯

博多区南本町2丁目地内における開発に伴う埋蔵文化財課事前審査願が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの麦野B遺跡群の南側に位置している。福岡市教育委員会が、これを受け試掘調査を実施した。現況は駐車場であり、調査の結果、表土下約20～50cmのローム層上面にて遺構が確認された。よって、面積5,700m²を対象に記録保存のための発掘調査を行うことになった。調査は1996年6月3日～1997年3月31日まで行った。

調査組織

調査委託 福岡市市民局地域振興部地域振興課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 文化財部長 後藤直(前) 平塚克則(現)

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野保基

調査担当 埋蔵文化財課 加藤隆也

試掘調査 埋蔵文化財課 長家伸

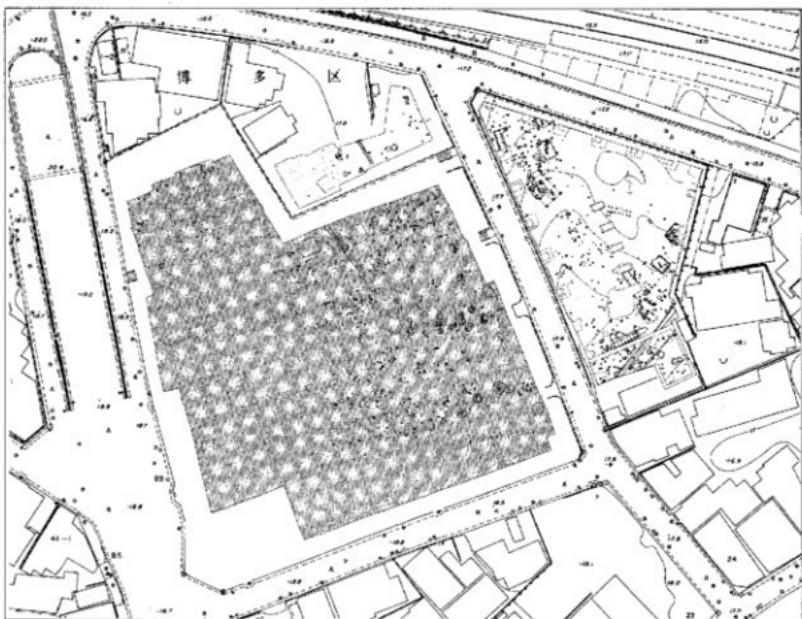


Fig. 2 第3次調査地点位置図 (1/1,000)

II 調査の記録

1 調査の概要

調査地の現況は駐車場で、地表は簡易アスファルト舗装、コンクリート舗装されていた。調査後は原状復旧するため調査区を北側約半分と南側半分とに分けて行った。6月3日から防塵バリケード設営など条件整備から行い、6月4日から調査区北側の表土剥ぎを開始した。西側の舗装面下の盛り土はうすく40~50cmでローム層となり、地形は東側にむかって緩やかに傾斜している。ただし、コンクリート基礎や配管などによる攪乱が著しい。東側は数メートルの盛り土の下に30~40cmのクロボク状土層がみられた。その上面で遺構検出作業を行ったが、遺構を把握することができず、土層観察ベルトを残しローム層まで下げた。検出遺構は竪穴住居、掘立柱建物、土坑、落し穴、柱穴などがみられた。9月21日現地説明会を開き、多くの見学者を招いた。その後、削平を免れローム層が良好に残存している谷部を中心に2m×2mのグリッドを4ヶ所設定しローム層を約50cm掘削したがローム層から遺物は出土しなかった。

9月30日から排土の移動と調査区南側の表土剥ぎを開始した。層位は基本的に北側調査区と同様で、西側は削平と攪乱が著しく、東側は低く部分的にクロボク状土層が残るところもあり、遺構は東側を中心で検出された。検出遺構は竪穴住居、土坑、柱穴などである。ローム層上面での調査が終了し、北側調査区と同様に2m×2mのグリッドを12ヶ所設定し掘削したところ、うち2ヶ所からナイフ形石器、台形石器、黒曜石片などが出土し、グリッドの拡大と新しいグリッドの設定を行い調査を行った。3月に入り部分的な埋め戻しと平行して掘削、記録作業を行い31日をもって全ての調査を終了した。



P h. 1 現地説明会風景



Fig. 3 第3次調査造構配置図 (1/300)

1. 積穴住居 (S C)

今回の調査では5基の積穴住居跡を調査した。丘陵の高所にあたる調査区西側は後世の削平と擾乱が著しいこともあり、明確な遺構はみられなかった。S C - 0 1、0 2、0 3は谷を囲むように位置し、カマドの方向は異なるが、住居の方向をほぼ同じくしている。調査区南側で確認されたS C - 0 5は小型の住居であり、住居構造が他のものと異なる。

S C - 0 1 (Fig. 4、P L. 2)

調査区北端、グリッド番号D 2にて検出された。東西3.72m、南北4.03m、深さ42cmを測る。壁際の一部には周壁溝と考えられる幅4~5cmの溝がめぐる。住居の西壁には幅50cm、長さ約2.5mの張り出し部がみられる。土層ベルトの観察と床面レベルの一致から住居址に切り合い関係はみられない。出入り口などの施設が考えられるが、特に床面の硬化などはみられなかった。カマドは東側壁につくりだされ住居址床面にはカマドに使われたと思われる灰白色粘土塊が散乱する。カマドは住居廃絶時に破壊されている。床面上での主柱穴の位置などは不明であったが、一面のみの床面を剥いだ地山整形面において住居東側に浅いへこみが2ヶ所みられ、上屋構造にともなう可能性が考えられる。

遺構の時期は出土遺物から8世紀中頃と考えられる。

出土遺物 (Fig. 5)

1~7は須恵器の坏身である。1はカマド内から出土した。体部・口縁部は直線的に外上方にのび、口径は11.6cmを測る。2は口径12.0cmを測る。3は口径14.6cmを測る。4は口径14.0cmを測る。5は無高台の坏身の底部であり、底径8.3cmを測る。6は覆土から出土した坏身の破片である。口径は15.4cmを測る。7も覆土から出土した。体部から口縁にかけて直線的にのび、器高は他に比べ高い。口径は18.0cmを測る。8~10は須恵器の皿である。8は口径14.8cm、底径10.6cm、器高2.0cmを測る。9は口径17.6cm、底径15.0cm、器高1.9cmを測る。10は覆土上面から出土した。口径18.2cm、底径14.2cm、器高1.9cmを測る。11、12は土師器皿である。11は床面上から出土した。体部・口縁部は緩やかな丸みをもって内溝する。口径17.6cm、底径9.0cm、器高3.0cmを測る。12は床面上から出土した。口径17.6cm、底径13.3cm、器高2.5cmを測る。13~16は土師器の壺口縁である。それぞれの口径は13が24.0cm、14が25.6cm、15が27.2cm、16が27.2cmを測る。16は破片であるがカマド内より出土した。17は瓶の取っ手部分の破片である。18は床面上から出土した砥石である。

4面以上の使用面がみられる。

S C - 0 2 (Fig. 6、P L. 2)

グリッド番号E 4、F 4にて検出された。東西3.6m、南北3.3m、深さ48cmを測る。住居の方向はS C - 0 1、S C - 0 3と同じくする。住居西壁を擾乱により切られる。壁際には幅10cmの溝が部分的にみられる。住居西壁南側にカマドがつけられている。カマドの堀方平面は四角形を呈する。燃焼部は住居址床面から10cmほど低くなってしまい、炭化物・焼土などがみられた。床は整地されており、床面にはカマドに使われたと思われる灰白色粘土塊がみられる。床面上においては上屋構造に伴う柱穴などは特にみられなかった。地山掘削面では浅いへこみがいくつかみられ、主柱穴に関連するものと思われる。

遺構の時期は出土遺物から8世紀中頃と考えられる。

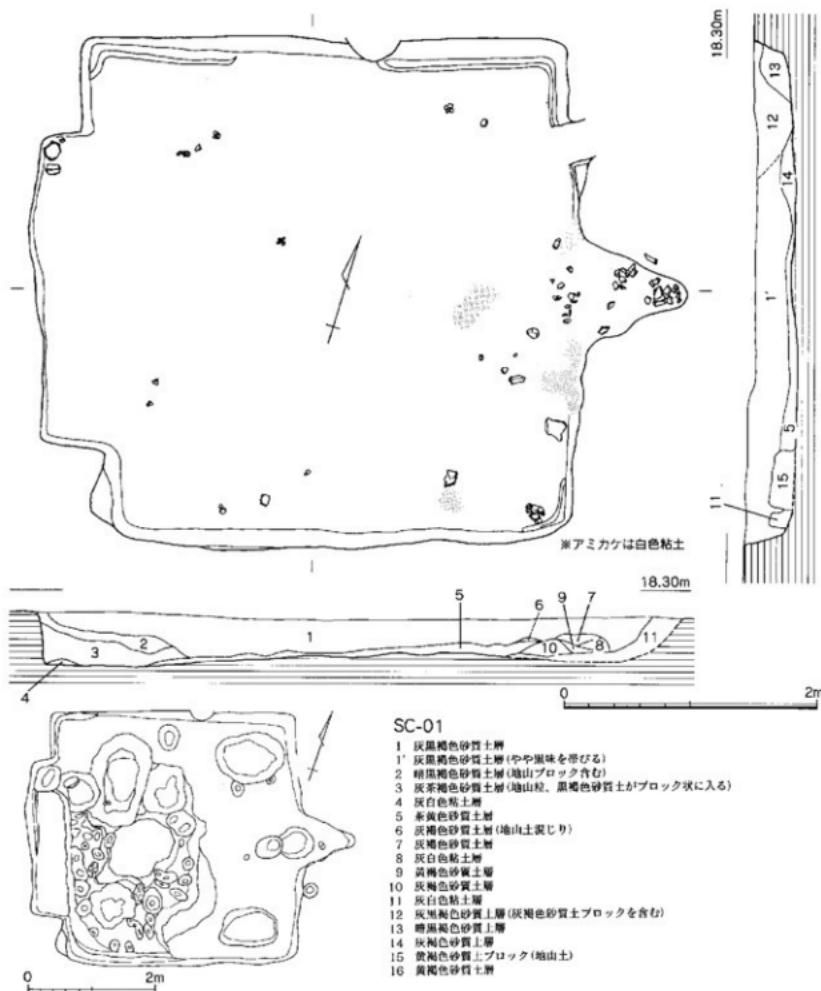


Fig. 4 SC-01 実測図 (1/40, 1/80)

出土遺物 (Fig. 7)

19、20はつぶれたボタン状つまみの付く須恵器坏蓋である。どちらもカマド付近の床面上から出土した。19は口径12.9cm、器高1.95cmを測る。20は口径19.0cm、器高2.4cmを測り、つまみは扁平なボタン状を呈し、頂部はわずかに尖る。口縁屈曲部には明瞭な稜線をもつ。21～25は須恵器の高台付坏身である。21は口径13.4cm、底径9.4cm、器高3.7cmを測る。高台は断面四角形を呈し、体部は上方に直線的にのび、口縁端部は緩やかに外反する。22は底径9.4cm、23は底径10.4cmを測

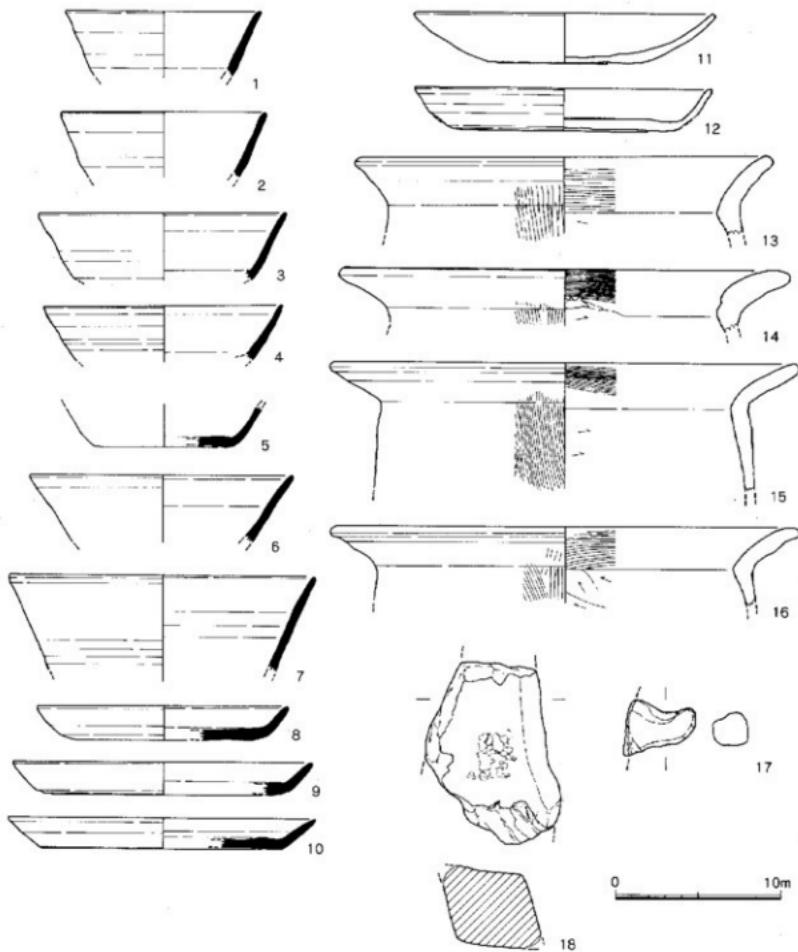


Fig. 5 S C - 0 1 出土遺物実測図 (1 / 3)

る高台付壺の底部破片である。23の高台は底端部につく。24はカマド内から出土した。口径17.3cm、底径10.0cm、器高5.6cmを測る。25はS C - 0 3出土の破片と接合できた住居内覆土から出土した高台付壺である。高台の断面は四角形を呈し、底端部近くにつく。口径17.9cm、底径12.0cm、器高5.7cmを測る。26、27は無高台の須恵器壺身である。26は床面上から出土した。口径13.2cm、底径10.0cm、器高3.7cmを測る。27は口径14.2cm、底径9.4cm、器高3.1cmを測る。28、29は土師器の壺である。それぞれの口径は28が26.2cm、29が29.6cmである。30は移動式カマドの破片である。器壁外面に

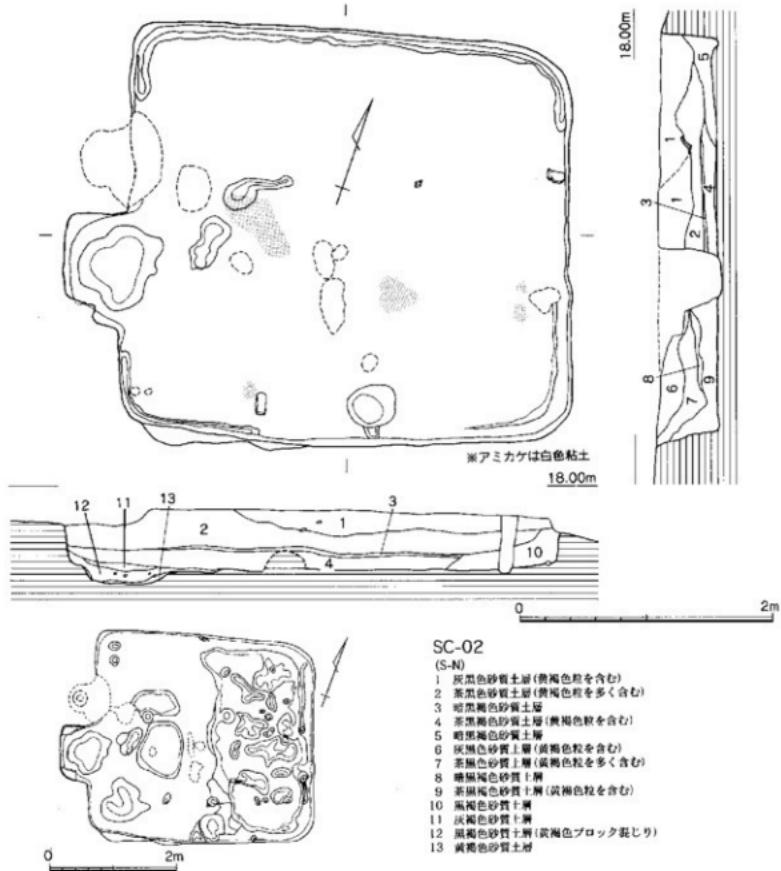


Fig. 6 SC-02 実測図 (1/40、1/80)

は明瞭なハケ目が残る。31は土師器高坏の脚部である。脚の丈は短い。32は床面上出土の土鈴である。33は長部15.5cm、短部7.8cm、最大厚さ3.1cmを測る砥石である。4面以上の使用面をもつ。34は覆土出土の鉄製品である。腐食が著しく細部の状況は不明であるが、全体的な形状と刃部の状況から刀子と考えられる。

SC-03 (Fig. 8、PL. 3)

SC-02の東側、グリッド番号F 4、G 4にて検出された。住居の方向はSC-01、SC-02と同方向をさす。東西3.2m、南北3.6m、深さ約60cmを測る。カマドは西壁ほぼ中央につくり付けられているが、西壁南側にもう一つカマドが検出された。2つのカマドの新旧は覆土の堆積状況

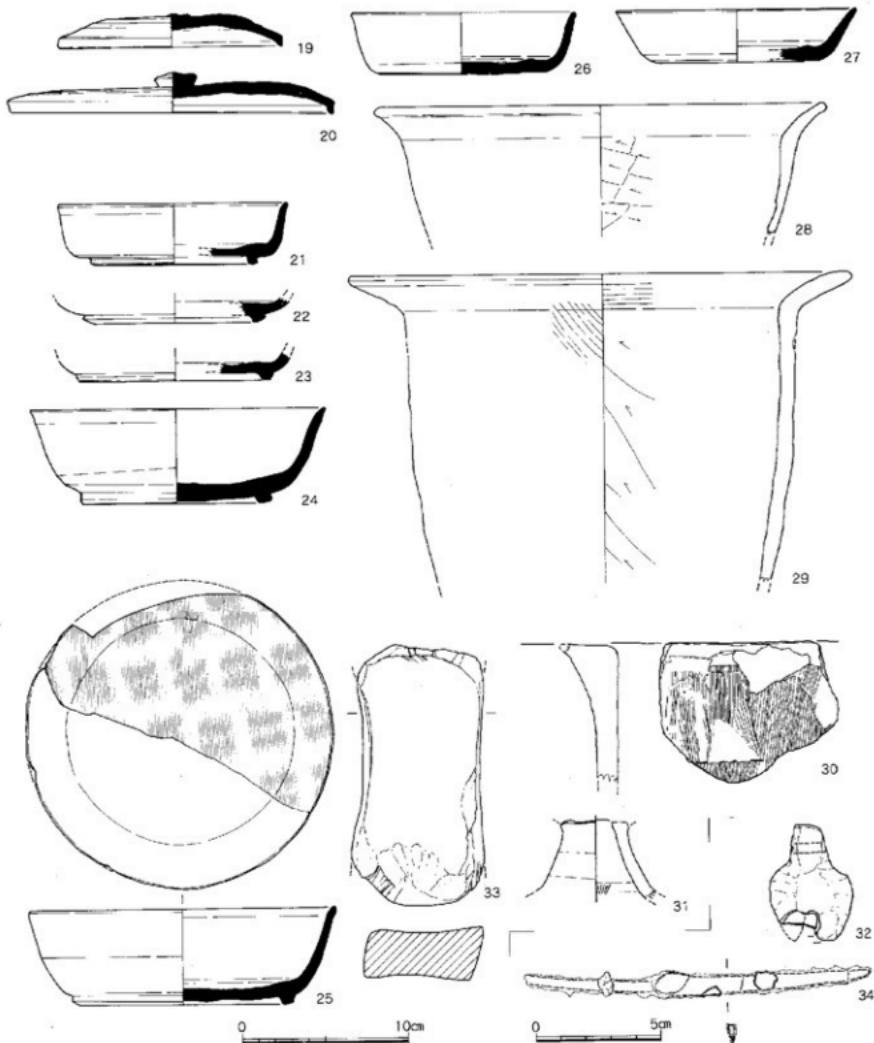


Fig. 7 SC-02 出土遺物実測図 (1/3、1/2)

から南側の方が古く、中央側が新しい。また、南側のカマド内には土師器の高环が伏せた状態で埋められており、南側にあったカマドを何かの理由で意図して埋め戻し、中央部に改築したと思われる。出土した高环も埋め戻しにともなう祭祀的な意味を有すると考えられる。一面である床面上において

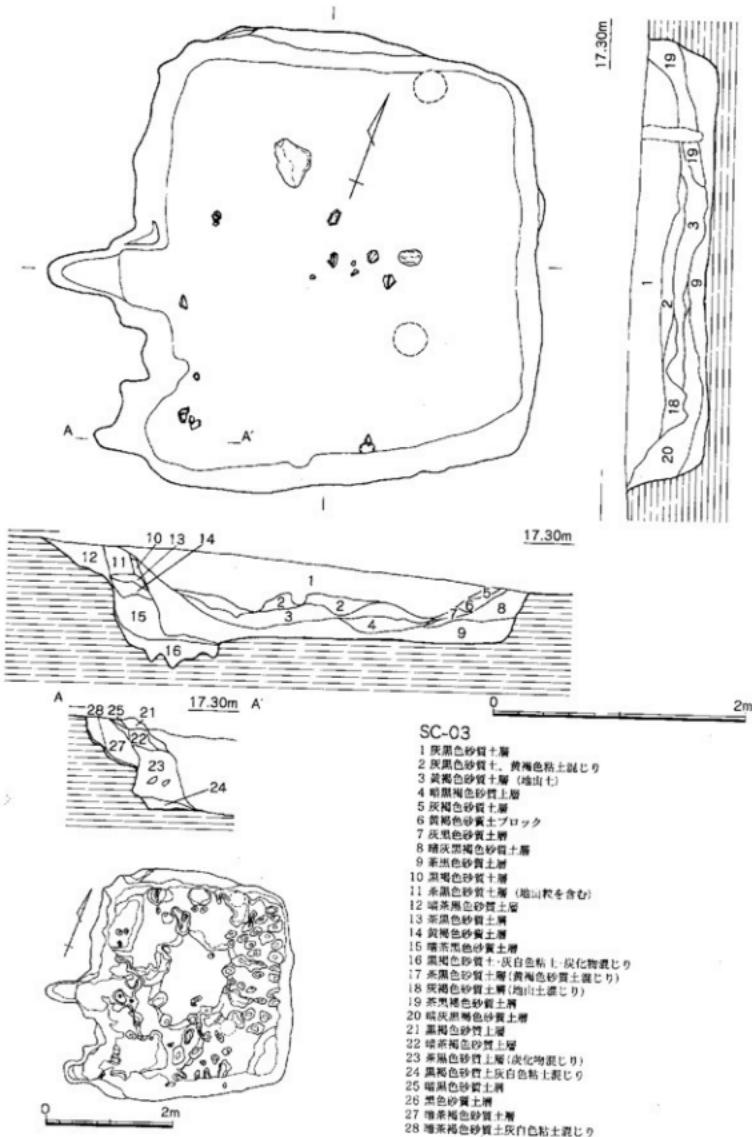


Fig. 8 SC-03 実測図 (1/40、1/80)

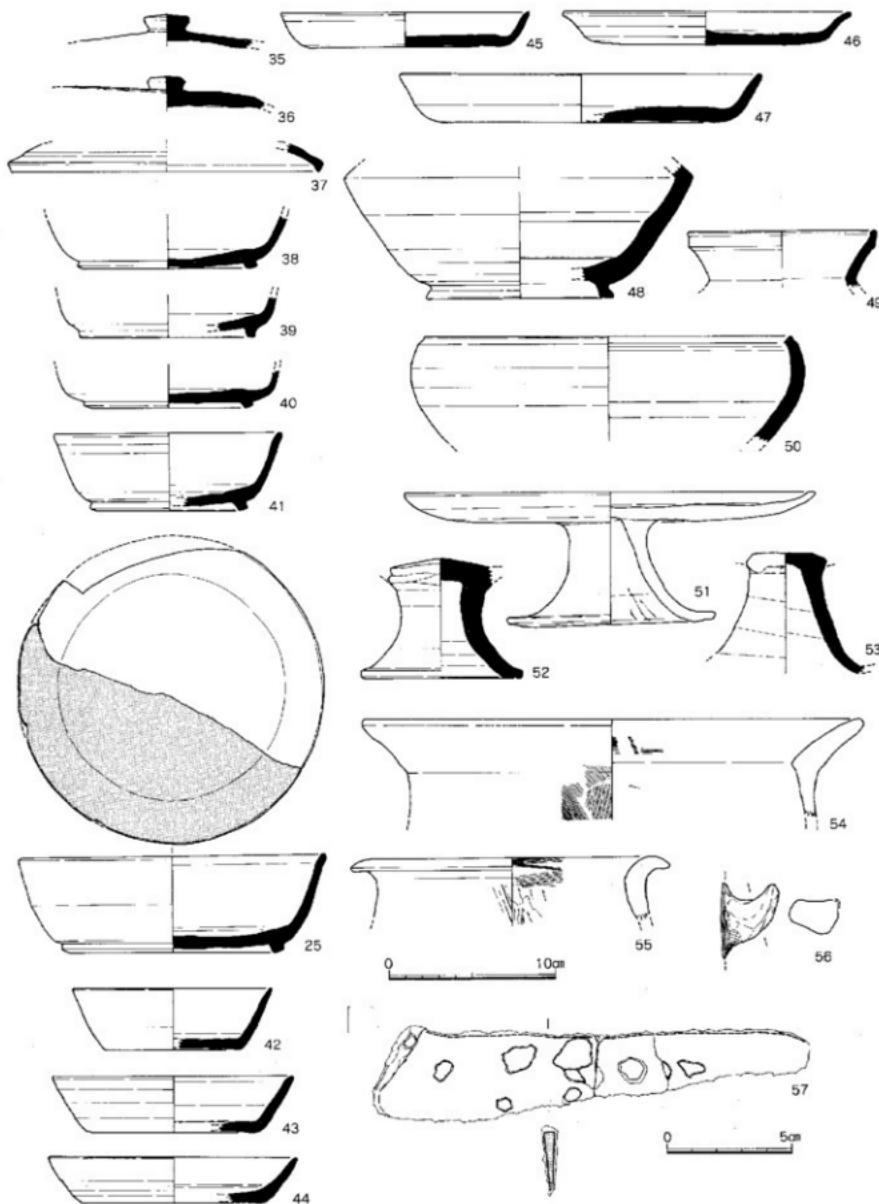


Fig. 9 SC-03 出土遺物実測図 (1/3、1/2)

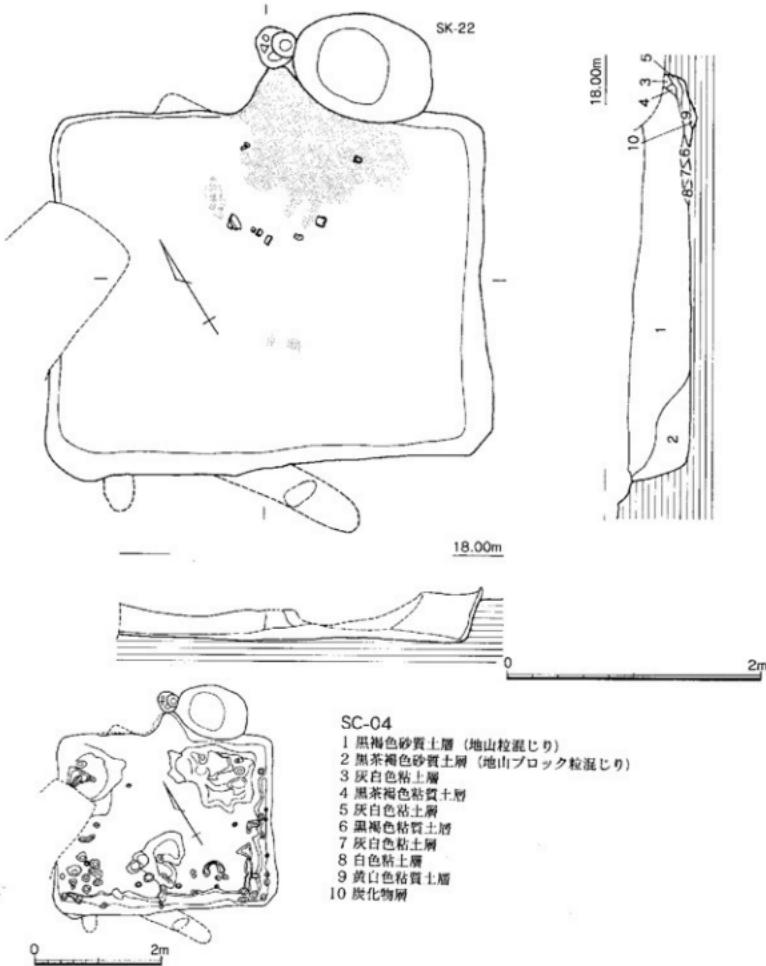


Fig. 10 SC-04 実測図 (1/40, 1/80)

は主柱穴などはみられなかった。地山掘削面では住居の中央部がやや高い状況でみられたが、上屋構造にともなう柱穴などの位置は不明であった。

遺構の時期は出土遺物から8世紀中頃と考えられる。

出土遺物 (Fig. 9)

35～37は須恵器の壺蓋である。35、36はボタン状のつまみがつき、頂部はわずかに尖る。住居覆土から出土した。37は中央側カマドから出土しており、口径18.0cmを測る。38～41は須恵器の高台付壺である。38は底径9.6cmを測り、高台断面は外側にはる。39は底径10.0cmを測る。40は底径9.0cm

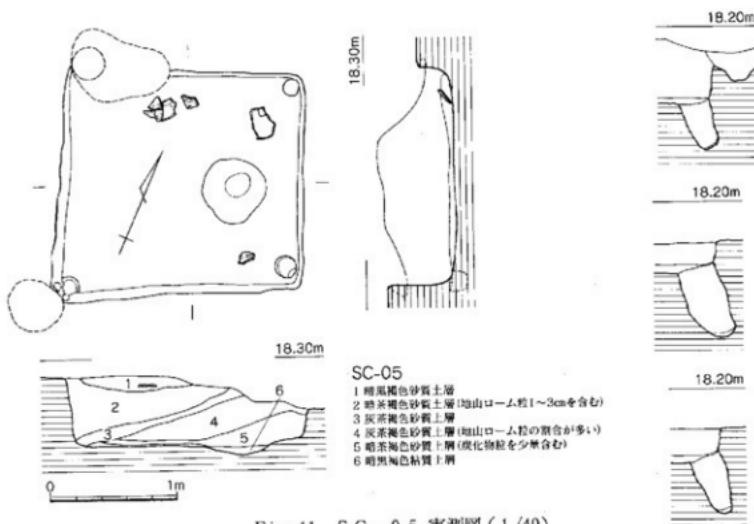


Fig. 11 SC-05 実測図 (1/40)

を測り、高台は底端部からやや内側につく。41は口径13.4cm、底径8.4cm、器高4.6cmを測り、高台断面は四角形を呈する。25はSC-02と接合した須恵器の高台付耳である。中央側カマドの北側覆土から出土した。口径17.9cm、底径12.0cm、器高5.7cmを測る。42~44は須恵器の無高台の坏身である。42は体部・口縁部は直線的に外側上方にひろがり、口径11.6cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測る。43は口径14.1cm、底径9.6cm、器高3.3cmを測る。44は口径14.5cm、底径10.8cm、器高2.8cmを測る。いずれも住居内覆土から出土した。45~47は須恵器の皿である。45は床面上から出土した。口径14.7cm、底径11.4cm、器高2.1cmを測る。46は覆土上面から出土した。口径16.8cm、底径13.8cm、器高2.0cmを測る。47は口径21.2cm、底径15.8cm、器高2.9cmを測る。48は床面上から出土した須恵器壺の下半部である。底径は10.9cmを測り、高台は内側が接地し、外側にはる。49は須恵器壺の口部の破片である。口径11.0cmを測り、口縁端部は上方にのび、端部はやや平坦である。50は須恵器鉢である。口径21.8cmを測る。51は南側カマドから伏せた状態で出土した土師器の高坏である。脚部の一部と口縁の一部を欠く。脚部の丈は短い。口径24.0cm、底径12.2cm、器高7.9cmを測る。52、53は須恵器の高坏脚部である。丈はともに短い。52の底径は9.2cmを測る。54、55は土師器の壺である。54は床面上から出土し、口径は29.4cmを測る。55の口径は16.6cmを測る。56は瓶の取っ手である。57は住居覆土から出土した鉄製品であり、刃部のつき方から鎌かと思われる。その他に覆土から移動式カマドの底部分の破片が出土している。

SC-04 (Fig.10、PL.3)

調査区中央部東より、グリッド番号F 6にて検出された。北東壁をSK-22に切られ、北西側壁を攪乱に切られる。長軸3.5m、短軸2.9m、深さ45cmを測る。北東側壁のほぼ中央にカマドがつくり付けられる。床面上には灰白色粘土塊がみられる。床面上において主柱穴などはみられなかった。

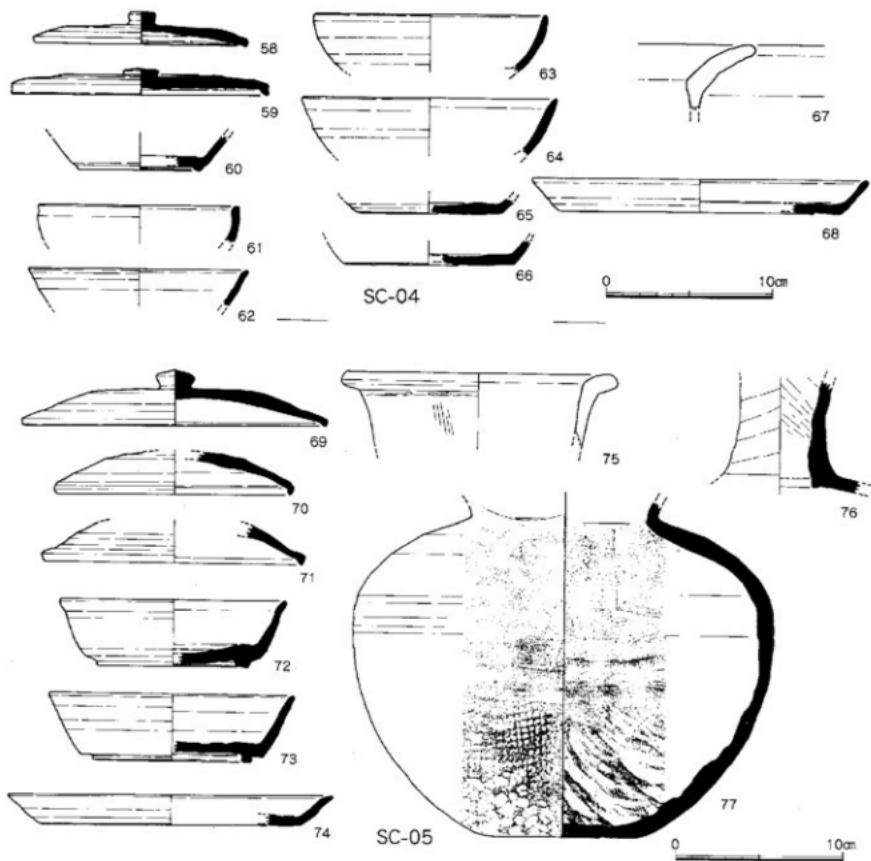


Fig. 12 SC-04, 05 出土遺物実測図 (1/3)

地山掘削面では住居のカマド側住居隅に2ヶ所浅い落ちこみがみられ、上屋構造とともに主柱穴などと関連すると思われる。また、この面の南東、南西壁際には杭状のものを打ち込んだ痕跡がみられた。

遺構の時期は出土遺物から8世紀後半頃と考えられる。

出土遺物 (Fig.12)

58, 59は覆土から出土した須恵器の壺蓋である。58は小さく丈の長い円筒状のつまみの付くもので口径12.4cm、器高1.9cm、つまみ高0.8cmを測る。口縁端部の内側には浅い沈線がつく。59は口径15.0cm、器高1.6cm、つまみ高0.4cmを測る。60～66は須恵器の壺身である。60は覆土から出土した高台付壺身であり、底径7.2cmを測る。高台の張り付け位置は底端部による。61は体部が丸みをもって内湾し、口径11.6cmを測る。62は体部が直線的に広がるもので床面上から出土した。口径

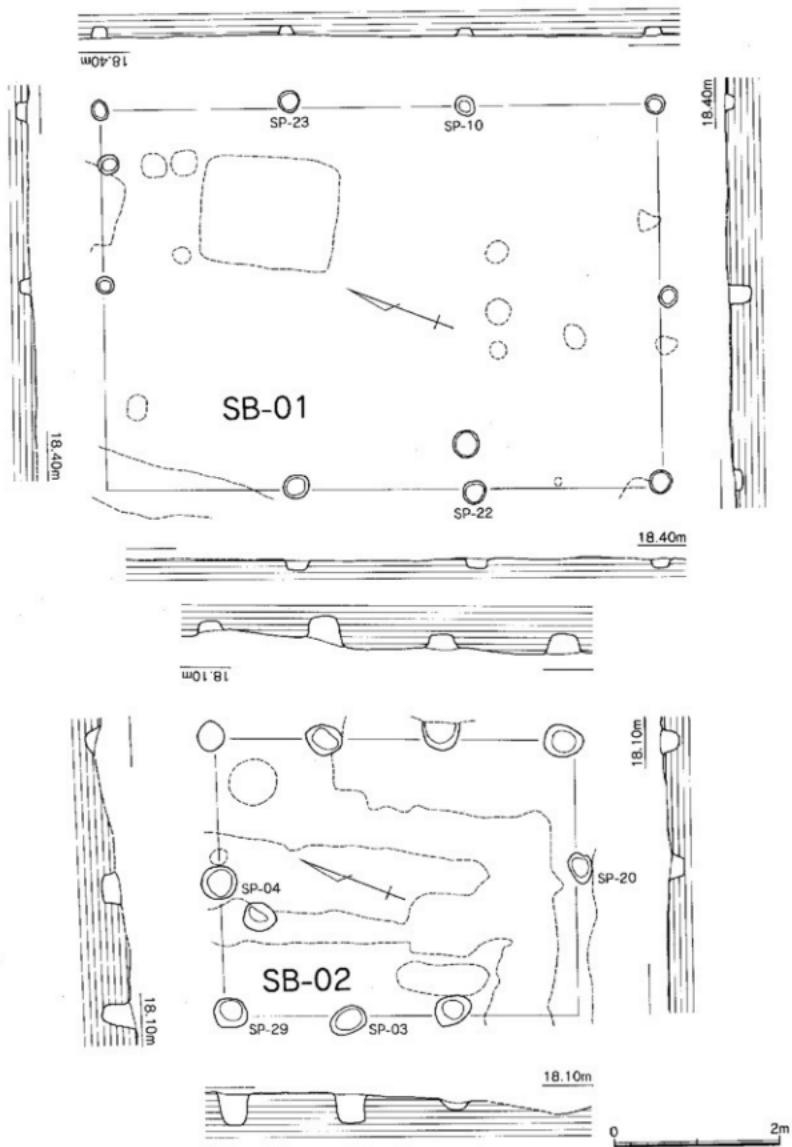


Fig. 13 挖立柱建物実測図 (1/60)



Fig. 14 掘立柱建物出土遺物（1 / 3）

は12.8cmを測る。63は口径13.6cm、64は口径15.0cmを測る。65、66は無高台の坏身である。65は底径8.4cmを測る。66は床面上から出土したもので、底径9.8cmを測る。67は床面上から出土した土師器の壺口縁である。68は須恵器の皿・盤で口径19.6cm、底径16.6cm、器高2.0cmを測る。

SC-05 (Fig.11, P.L.4)

調査区南東側、グリッド番号H 9にて検出された。北西角、南西角は壊乱に切られる。平面は長軸1.92m、短辺1.76mの略方形を呈する。深さは残存の良好な部分で約55cmを測り、平坦な床面には顕著な整地はみられず、東側に炭化物が集中する直径約50cm、深さ10cmの炉がつくられている。主柱穴は4本と思われ床面の壁際隙間に柱穴を確認した。柱穴の直径は14cm～16cmを測り、外側に張り出すよう観察された。柱材の抜き取り時の影響も考えられるが、柱の角度を表していると仮定するならテント状の上屋構造も考えられる。住居周辺では上屋に伴う柱、杭などの痕跡はみられなかった。

遺構の時期は出土遺物から8世紀後半頃と考えられる。

出土遺物 (Fig.12)

69～71は須恵器の壺蓋である。69はつまみがつき、口縁部の屈曲は小さい。口径17.8cm、器高3.4cmを測る。70は口径13.6cm、71は口径15.2cmを測る。72、73は高台付壺である。72は断面四角形の高台が付き口径13.3cm、底径9.0cm、器高4.0cmを測る。73は口径14.4cm、底径8.4cm、器高4.0cmを測る。74は須恵器の皿である。口径19.1cm、底径15.5cm、器高1.8cmを測る。75は小型の土師器甕である。口径15.6cmを測る。76は須恵器長頸壺の頭部の破片である。77は須恵器の壺である。外面には格子目のタタキ痕が、内面には同心円紋のアテ真痕がみられる。

2. 掘立柱建物 (SB)

調査において多くの柱穴がみられたが、建物として復元できたのは以下の2棟である。建物の方向は竪穴住居とはほぼ同方向をさす。

S B - 0 1 (Fig.13)

調査区北側、グリッド番号C 3、D 3で検出された。梁行2間、桁間3間の南北に長い建物である。北西の柱穴は擾乱により欠く。桁の方位はN-22°-Wをとる。梁間の全長4.6m、桁間の全長6.7mを測り、面積約30.8m²となる。柱穴掘り方は楕円形で、直径20~28cmを測る。深さは10~15cmを測り、後世の削平が著しいことを予想させる。

遺構の時代は埋土の土色と土質、出土遺物から8世紀代と考えられる。

出土遺物 (Fig.14)

78は土師器の壺の破片である。体部はやや内湾し、口径は14.4cmを測る。

S B - 0 2 (Fig.13)

調査区北寄り、グリッド番号E 4、E 5で検出された。梁間2間、桁間3間の南北に長い建物である。南西の柱穴は擾乱により欠く。桁の方位はN-21°-Wをとり、S B - 0 1とほぼ同方向にむく。梁間の全長3.3m、桁間の全長4.3mを測り、面積約14.2m²となる。柱穴掘り方は楕円形で、直径30~46cm、深さ10~35cmを測る。

出土遺物 (Fig.14)

79は須恵器の壺の破片である。体部は直線的にのび、口縁端部はやや外反する。口径は14.6cmを測る。

3. 土坑 (SK)

SK番号を付した土坑状遺構は30基あるが、その形状は円形、楕円、長楕円、不定形などあり、また出土遺物や覆土の色・質、規模などから性格や時代もいくつかに分かれる。遺構の性格からSK-0 3、0 4、0 7、0 8は落し穴として別にまとめた。また、主に灰黒色を覆土とする平面円形を呈するものをこの項の後半にまとめた。よって遺構の記述は順序不同になっている。

SK - 0 1 (Fig.15)

グリッド番号C 3にて検出した。周辺に他の遺構はみられない。平面は直径1.1mの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。

SK - 0 2 (Fig.15)

グリッド番号G 4にて検出した。西側にはSC - 0 3が位置する。平面は長楕円形を呈し、長軸はN-20°-Wをとる。長軸1.6m、短軸1.1m、深さ25cmを測る。

遺構の時期は覆土が竪穴住居のものと大きな差異がみられないことと出土遺物から8世紀代と考えられる。

出土遺物 (Fig.19)

80は須恵器の高台付壺である。完形であるが焼き歪みが著しい。口径11.5cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測る。81は高台付壺である。口径15.2cm、底径9.0cm、器高4.2cmを測る。82は土師器の壺である。口縁内側に稜線がつく。口径18.4cmを測る。

SK - 0 5 (Fig.15)

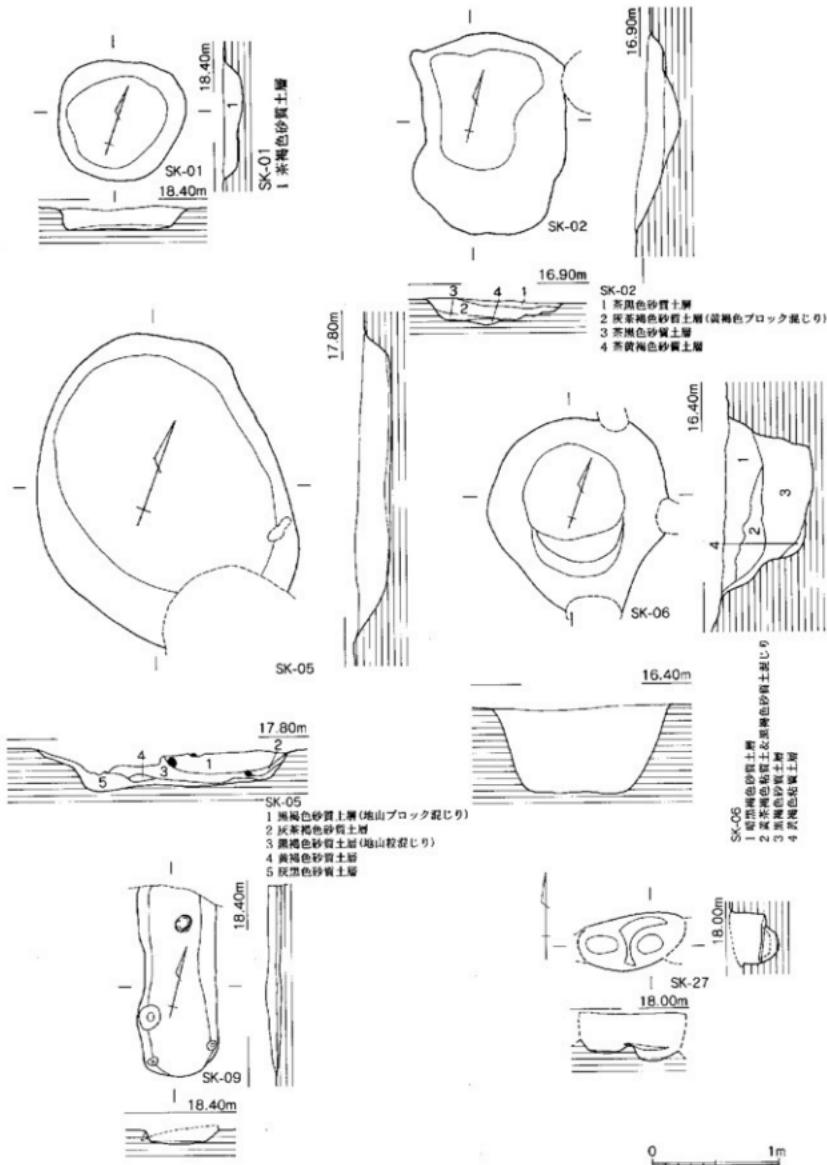


Fig. 15 土坑 (SK) 実測図1 (1/40)

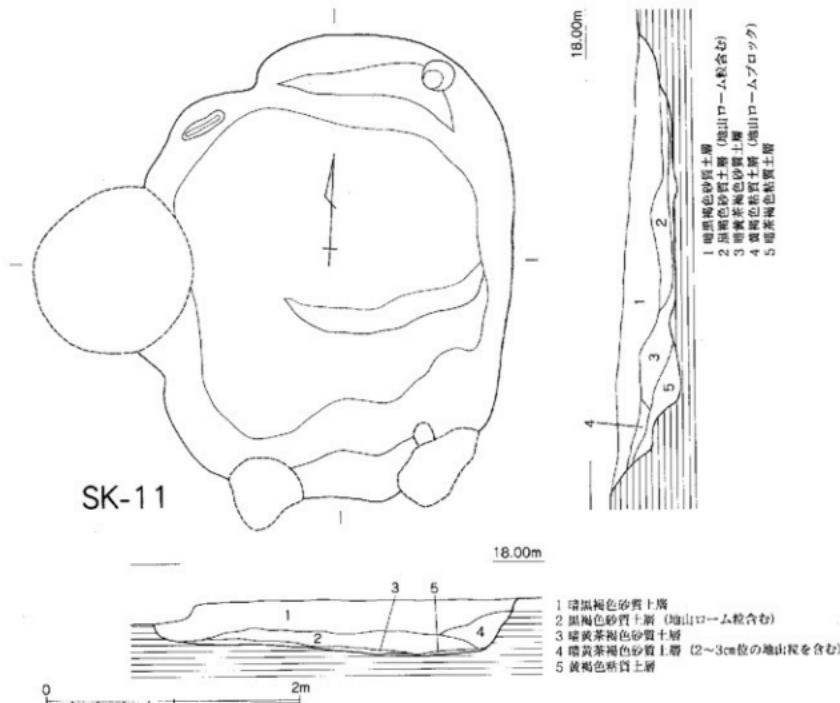


Fig. 16 土坑（SK）実測図 2 (1/40)

調査区東端、グリッド番号H 6で検出した。当初、調査区外に遺構がひろがるため調査区をその部分拡張した。平面は長椭円形を呈し、長軸はN-48°-Wをとる。長軸2.5m、短軸2.0m、深さ25cmを測る。

遺構の時期は出土遺物から8世紀代と考える。

出土遺物 (Fig.19)

83は須恵器の壺である。体部は直線的にのびる。口径13.2cmを測る。

SK-06 (Fig.15)

調査区北東端、グリッド番号H 4で検出した。旧地形の谷部の最深部に位置する。平面は椭円形を呈し、直径1.4m、深さ70cmを測る。遺構の底部は八女粘土でとまっており、烏栖ローム層と八女粘土層の境から湧水があったのか、降雨時に谷を流れる水を溜める目的で造られたと考えられる。

遺構の時期は出土遺物から8世紀代と考える。

出土遺物 (Fig.19)

84は須恵器の壺である。体部は直線的にのび、口径14.0cmを測る。85は須恵器の高台付壺である。口径13.4cm、底径9.9cm、器高3.8cmを測る。86は須恵器の高台付壺である。口縁は直線的に広が

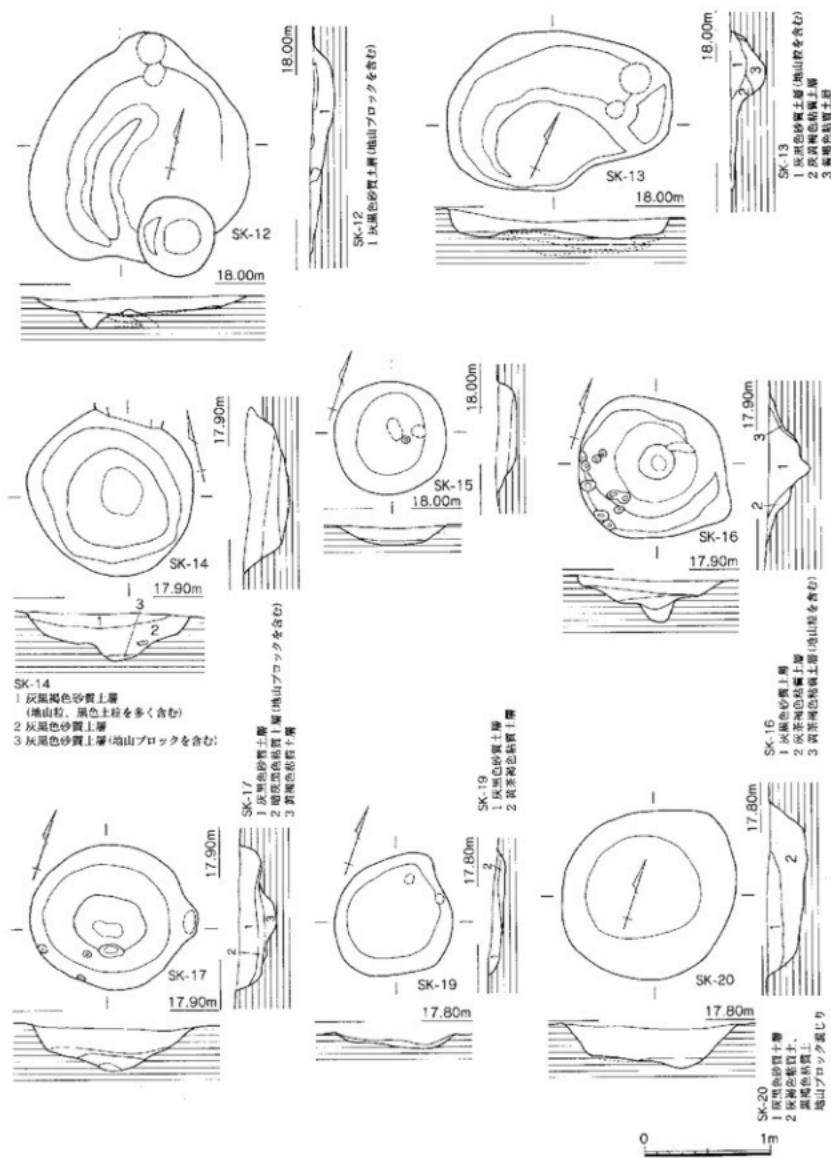


Fig. 17 土坑(SK)実測図3 (1/40)

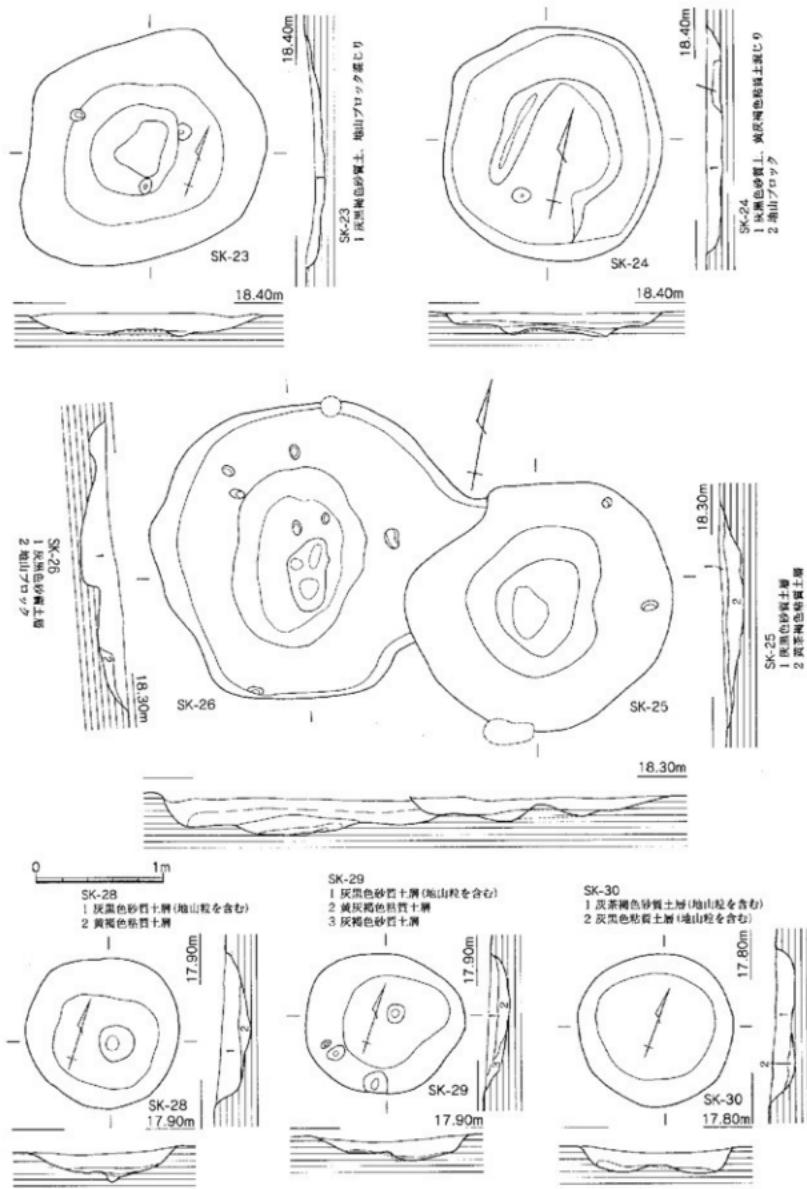


Fig. 18 土坑 (SK) 実測図 4 (1/40)

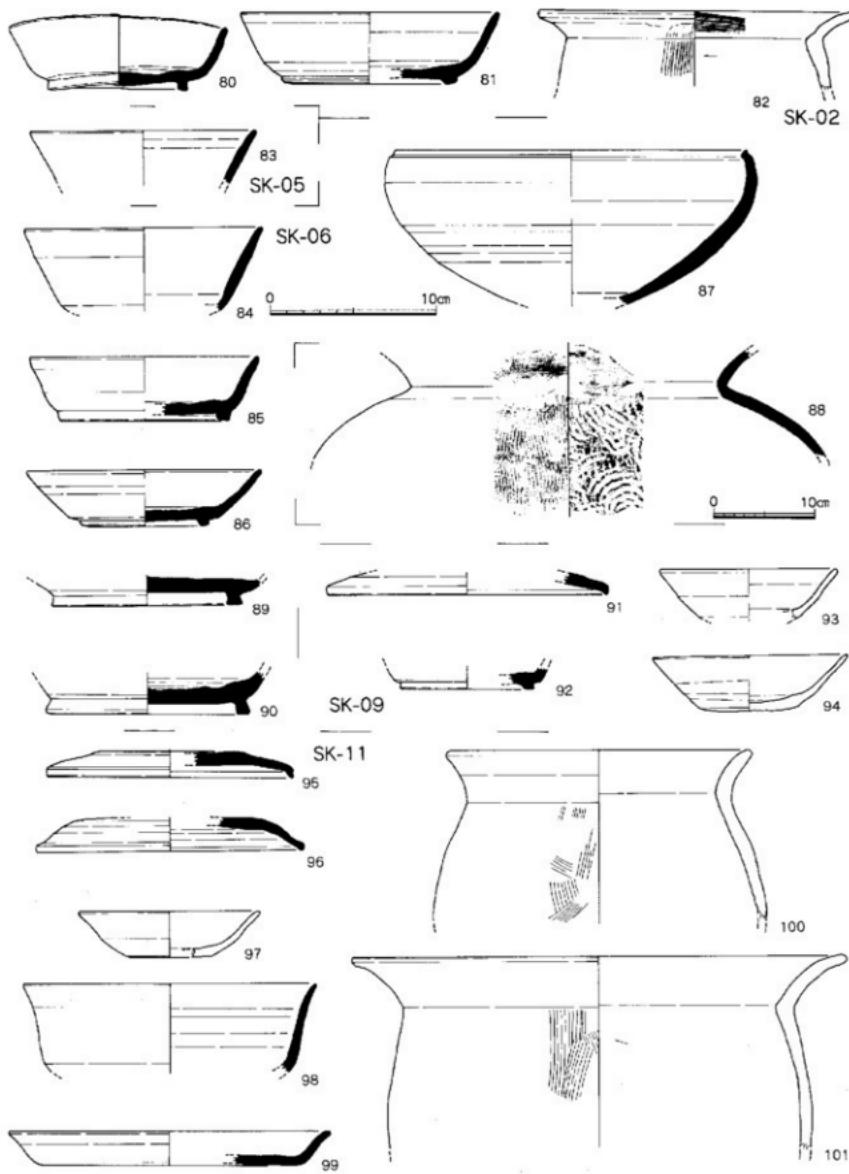


Fig. 19 土坑 (SK) 出土遺物実測図 1 (1/3、1/4)

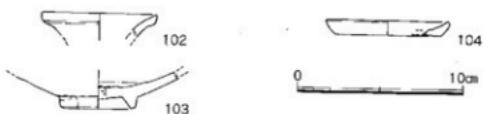


Fig. 20 土坑(SK)出土遺物実測図2 (1/3)

る。89、90は須恵器の壺底部である。底径はそれぞれ11.0cm、10.7cmを測る。

SK-09 (Fig.15)

調査区南側、グリッド番号F 9で検出した。長椭円形の遺構で北側を攪乱で切られる。主軸はN-15°-Wをとる。長軸は残存で1.5m、短軸60cm、深さ10cmを残す。

遺構の時期は出土遺物から8世紀代と考える。

出土遺物 (Fig.19)

91は須恵器壺蓋である。口縁端部内面に浅い段をもち、口径16.4cmを測る。92は須恵器の高台付壺である。高台は断面四角形を呈し、底径は7.8cmを測る。93、94は土師器の壺である。93は口径10.4cmを測る。94は底部はやや丸みをもち、口縁は直線的にのびる。口径11.4cm、底径5.9cm、器高3.3cmを測る。

SK-27 (Fig.15)

グリッド番号G 7で検出した。SC-04、SK-11の南側に位置する。北側東西端を攪乱に切られる。底面にくぼみが2ヶ所みられ深さ40cmを測る。全体の規模は不明であるが柱穴の可能性も考えられる。埋土は黒褐色砂質土であり、竪穴住居のものと近似するため集落内の構造物との関連がうかがえる。

SK-11 (Fig.16、PL.4)

調査区東側、G 6・H 6で検出された大型遺構である。西側にはSC-04が位置する。西側をSK-18に切られる。平面は不定形を呈するが、部分的には隅丸方形ともとらえられる。長軸は3.7mを測る。底面は平坦であるが、壁は緩やかに立ち上がる。調査時は平面形、深さなどから竪穴住居として掘削作業を行ったが、柱穴、カマド施設、炭化物や焼土がみられないことから土坑として扱った。覆土は自然堆積であるが、地山ロームブロックは多くみられない。

遺構の時期は出土遺物から8世紀代と考える。

出土遺物 (Fig.19)

95、96は須恵器の壺蓋である。それぞれの口径は14.4cm、15.6cmを測る。97は土師器の壺である。口径10.6cm、底径5.2cm、器高2.8cmを測る。98は須恵器の壺である。体部の立ち上がりが強い。口径17.2cmを測る。99は須恵器の皿である。口径18.8cm、底径15.7cm、器高2.0cmを測る。100、101は土師器の壺である。100は口縁部の屈曲が緩やかであり、101は口縁内面に明瞭な稜をもつ。口径はそれぞれ17.4cm、28.6cmを測る。

り、口径に対して器高が低い。口径13.8cm、底径6.7cm、器高3.3cmを測る。87は須恵器の鉢である。口縁端部外間に段がつき、口径20.8cmを測る。88は須恵器の壺である。

外面には平行タキ痕、内面には同心円紋のアテ具痕が残る。

SK-12 (Fig.17)

調査区東側、グリッド番号H 7にて検出された。平面は不定形を呈し、長径1.8m、深さ18cmを測る。中央部が溝状にやや深くなっている。

SK-13 (Fig.17)

調査区東側、グリッド番号H 7にて検出された。平面は長楕円形を呈し、長軸方位はN-57°-Eをとり、長軸1.7m、深さ28cmを測る。北がやや深くなっている。

出土遺物 (Fig.20)

102は白磁瓶の口縁部破片である。口径6.8cmを測る。103は白磁碗である。焼成不良のため釉が白濁している。内面見込みは輪状に釉を搔き取っている。

SK-14 (Fig.17)

調査区東側、グリッド番号H 6にて検出された。平面は円形を呈し、直径1.3m、深さ38cmを測る。中央部がやや深くなっている。

SK-15 (Fig.17)

調査区東側、グリッド番号G 6・G 7にて検出された。平面は円形を呈し、直径90cm、深さ12cmを測る。中央部がやや深くなっている。

SK-16 (Fig.17)

調査区東側、グリッド番号G 6・G 7にて検出された。平面は円形を呈し、直径1.1m、深さ32cmを測る。中央部が深くなっている。

SK-17 (Fig.17)

調査区東側、グリッド番号G 6にて検出された。平面は不定形を呈し、直径1.2m、深さ35cmを測る。中央部がやや深くなっている。

SK-18

調査区東側、グリッド番号G 6にて検出された。SK-11を切る。平面は円形を呈し、長径1.3m、深さ20cmを測る。中央部が溝状にやや深くなっている。

SK-19 (Fig.17)

調査区東側、グリッド番号G 6にて検出された。平面は不定形を呈し、長径1.1m、深さ8cmを測る。底面は平坦である。

SK-20 (Fig.17)

調査区東側、グリッド番号G 6にて検出された。平面は略円形を呈し、長径1.5m、深さ30cmを測る。底部は平坦である。

SK-21

調査区東側、グリッド番号F 6にて検出され、SC-04を切る。平面は円形を呈し、直径1.5m、深さ20cmを測る。中央部がやや深くなっている。

SK-22 (Fig.10)

調査区東側、グリッド番号F 6にて検出され、SC-04のカマド部分を切る。平面は楕円形を呈し、長径1.1m、深さ35cmを測る。底部は平坦である。

SK-23 (Fig.18)

調査区東側、グリッド番号G 8にて検出された。平面は不定形を呈し、長径2.1m、深さ16cmを測る。中央部がやや高くなっている。

出土遺物 (Fig.20)

104は土師器小皿である。口径7.2cm、底径6.2cm、器高0.9cmを測る。

SK-24 (Fig.18)

調査区東側、グリッド番号G 8にて検出された。平面は円形を呈し、直径1.9m、深さ18cmを測る。中央部が溝状にやや深くなっている。

SK-25 (Fig.18)

調査区東側、グリッド番号H 8にて検出され、SK-26を切る。平面は楕円形を呈し、長径2.1m、深さ16cmを測る。中央部が深くなっている。

SK-26 (Fig.18)

調査区東側、グリッド番号H 8にて検出され、SK-25に切られる。平面は円形を呈し、直径2.4m、深さ22cmを測る。中央部が深くなっている。

SK-28 (Fig.18)

調査区東側、グリッド番号H 6にて検出された。SK-11の東側に位置する。平面は円形を呈し、直径1.2m、深さ22cmを測る。中央部に凹みをもつ。

SK-29 (Fig.18)

調査区東側、グリッド番号H 6・H 7にて検出された。SK-28の南側、SK-11の東側に位置する。周辺には同様な遺構が分布する。平面は不定形を呈し、長径1.3m、深さ16cmを測る。中央部に凹みをもつ。

SK-30 (Fig.18)

調査区東側、グリッド番号G 6にて検出された。SC-04の東側、SK-11の西側に位置する。周辺には同様な遺構が分布する。平面は円形を呈し、直径1.2m、深さ16cmを測る。中央部はやや高くなっている。

4. 落し穴

調査区内北東側谷落ち部にて4基の落し穴を検出した。遺物は出土していない。遺構は等高線に平行に配置し、各遺構の方向は等高線に直行する。それぞれの直線距離はSK-08から03が7.5m、SK-03から04が6.5m、SK-04から07が9.5mを測る。西端については調査区外にのびることが予想されたため調査終了後調査区の拡張を行ったが、3次調査区と4次調査区の間では同様の遺構はみられなかった。東端は東側2次調査において今回検出した落し穴の延長線上に同様の性格をもつ遺構があり、道路部分でいくつか離れると思われるが全体の様相は明らかとなった。調査時は土坑として扱ったため遺構番号が不規則になった。記述は西側から08、03、04、07の順序で行う。

SK-08 (Fig.22、PL.5)

グリッド番号F4に位置し、8世紀の浅い溝に切られる。床面の形態は隅丸長方形を呈し、また上面プランも同様の形態をとる。床面規模は長軸1.1m、短軸75cmを測り、方位はN-22°-Eをとる。上面プランは1.3m×95cmを測り、現存の深さは80cmである。底面には2穴のピットが確認され、深さは底面からそれぞれ26cmと8cmを削る。

SK-03 (Fig.22、PL.5)

グリッド番号F5、G5に位置する。床面の形態は隅丸長方形を呈し、また上面プランも同様の形態をとる。床面規模は長軸1.2m、短軸80cmを測り、方位はN-12°-Eをとる。上面プランは1.6m×1.35mである。現存の深さは110cmである。底面にはピットが1穴確認され、深さは底面から10cm

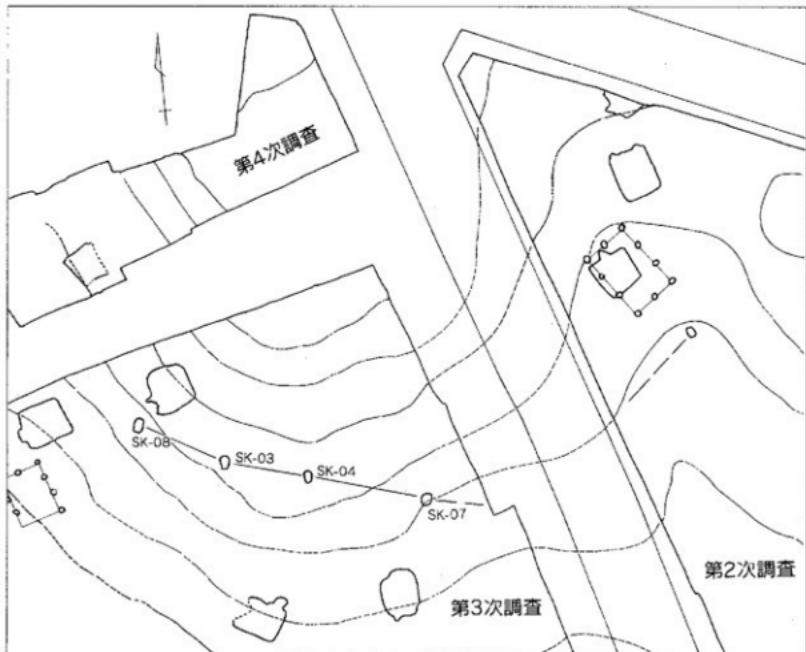


Fig. 21 落し穴配置図2 (1/400)

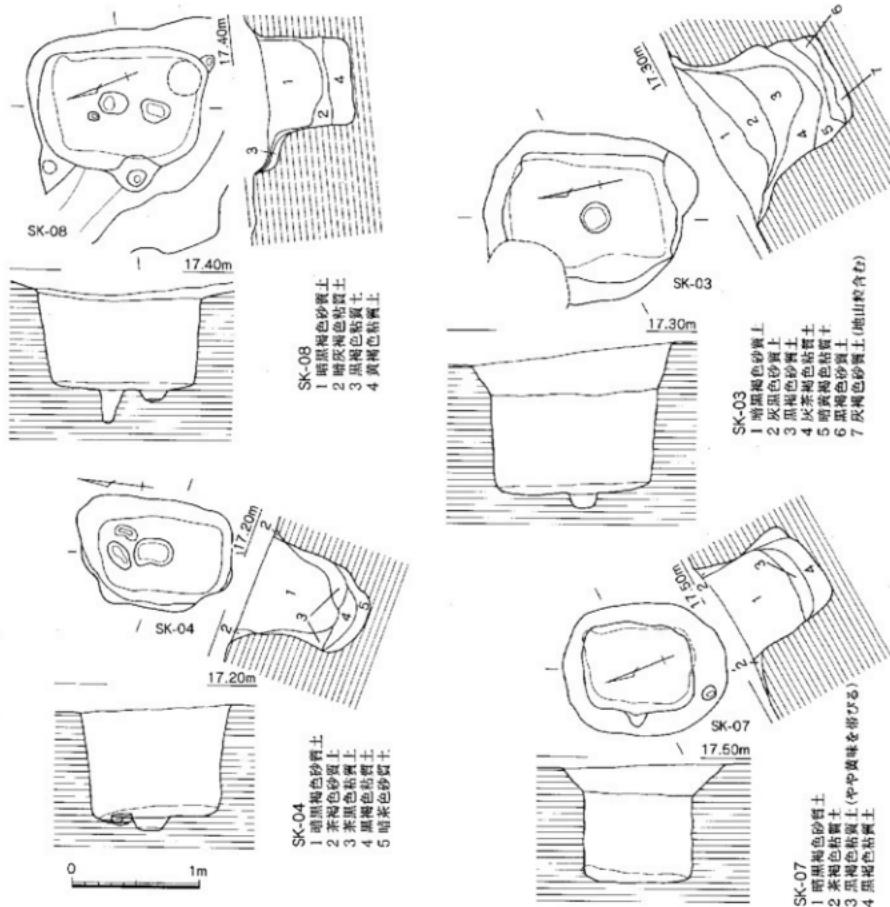


Fig. 22 落し穴実測図 (1/40)

を測る。

SK-04 (Fig.22, PL.5)

グリッド番号G 5に位置し、床面の形態は隅丸長方形を呈する。また上面プランも同様の形態をとる。床面規模は長軸95cm、短軸60cmを測り、方位はN-6°-Wをとる。上面プランは1.2m×85cmである。現存の深さは85cmである。床面谷側には3穴のピットが確認され、深さは底面から4~10cmを測る。

SK-07 (Fig.22, PL.5)

グリッド番号H 6に位置する。床面の形態は隅丸長方形を呈し、また上面プランも同様の形態をとる。床面規模は長軸80cm、短軸60cmを測り、方位はN-21°-Wをとる。上面プランは1.3m×1.05mである。現存の深さは95cmである。底面にピットはみられない。

5. 小 結

堅穴住居について

同一集落である第2次調査を含めて、堅穴住居の時代はすべて8世紀中頃から後半に属するものであるが、そのうちSC-01, 02, 03, 05はカマドのつく方向は異なるが、住居の方向をほぼ同じくする。SC-03ではカマドの改築がみられ、土師器の高杯を伏せた状態で埋め戻していた。またSC-02と03の覆土から出土した高台付环が整理段階で接合することがわかり、埋没時期が同じであることを裏付ける資料となった。SC-05出土遺物と他の住居内出土遺物には時代差がみられないが、中央炉、明瞭な主柱穴をもち、規模など構造が他のものとは異なる。また、この集落が約半世紀の後なぜ廃絶してしまうかの資料を、今回の調査では得られなかった。

住居構築時の地山掘削方法にもいくつかみられた。01, 02, 04の床面下地山面でみられるように、ある範囲が一段低くなっているものである。もうひとつは03でみられるように地山掘削面が輪状に深くなっているものである。前述のものは一部分を先行して掘削し、まず掘る深さを決め、後から規模と方向にあわせて掘削を行ったと考えられる。後述のものは先に規模と方向を決めてそれにあわせて周囲から掘削を行った結果と思われる。

掘立柱建物について

2棟の建物を復元したが、堅穴住居と方位をほぼ同じくして建てられている。そのことから堅穴住居とともに集落を構成する建物であったと考えられる。第2次調査検出の堅穴住居や2間×3間の掘立柱建物も同位置集落と考えられるが、調査では堅穴住居と掘立柱建物とに切り合い関係があり、検出遺構すべてが集落の景観とは考えられない。

土坑について

ほぼ平面が円形を呈する土坑群が南側にみられ、切り合い関係、覆土の土質・土色、出土遺物から13世紀中頃と考えられる。また、いくつかの柱穴出土の遺物には11世紀後半から12世紀初頭に位置づけられる白磁碗などの破片もあり、古代末から中世にかけての人々の生活跡がみられる。ただし、後世の削平が著しく部分的であるため、その全容は明らかではない。

落し穴について

4基の遺構は配置状況、平面形や主軸が谷部を向くことなどから同一の目的で、谷頭を開むようにつくられたことは明らかである。遺構内の土層は自然堆積を示し、上部がラッパ状に開くことと、遺構内に地山土と同質の土が二次的に多く堆積しないことから、開口した状態で長時間放置されていたと考えられる。遺構の掘削された時期は出土遺物が皆無であることから具体的に断定はできないが、遺構内土壤の科学分析によりアカホヤ火山灰が検出されており、遺構の上限は確定される。下限については遺構面全体を覆うクロボク状土層と遺構内土は明確に区別はできないが、堅穴住居内の同色の土壤とは締まりかたが明らかに異なり堆積後から現在までに大きな時間差が考えられる。複数で構成すると思われる落し穴には、直線的に配置するもの、弧を描くもの、谷頭を開むものといいくつかの形態がみられ、今回と同様の遺構は春日市駿河遺跡でもみられるが、連なる遺構から遺物は出土していない。今後、類例の増加に期待したい。

2 旧石器時代の調査

1. 調査の概要

本調査地周辺遺跡の調査では旧石器時代遺物が確認されており、今回の調査地点においても同時代遺物の出土が考えられていた。先行して行った北半調査区では、高所である西側は削平と攢乱が著しく、東側の緩やかな斜面を中心に $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを4ヶ所設定し、それぞれ約50cmの掘削作業をおこなったが、遺構、遺物は検出されなかった。南半調査区は北側に比べやや高く、調査進行中、ローム層上面での遺構検出時に基盤となる褐色ローム層より黒曜石剝片がみられた。ローム層中に遺物が包含していることが確認されたことから、上面の調査終了後、攢乱の著しい部分を避け、ローム質土壌が良好にみられるところを中心に100m²に対して $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを1ヶ所設定して調査することにした。まずグリッドを12ヶ所設定し、遺物がみられたグリッドの出土状況をみながら順次拡張していった。時間上の制約から南半調査区の攢乱部を除いた約半分の調査をおこなうにとどまり、調査区全体を調査していない。

2. 旧石器時代の構造と遺物

1) 遺跡の立地と出土状態

本調査地は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積段丘、中位段丘上に位置する。現在地形を窺い知ることはできないが、昭和20年代の航空写真などを見ると、以前は多くの開析谷が入り込み複雑な地形をなしていたことがわかる。中位段丘上、開析によって北に向かって三叉状に開く台地を三分し、西から南八幡遺跡群、麦野B遺跡群、麦野C遺跡群、麦野B遺跡群とC遺跡群の間から北西に伸びる丘陵を麦野A遺跡群と呼称している。既存の調査では麦野C遺跡群第1次調査、南



Ph. 2 旧石器時代調査作業風景

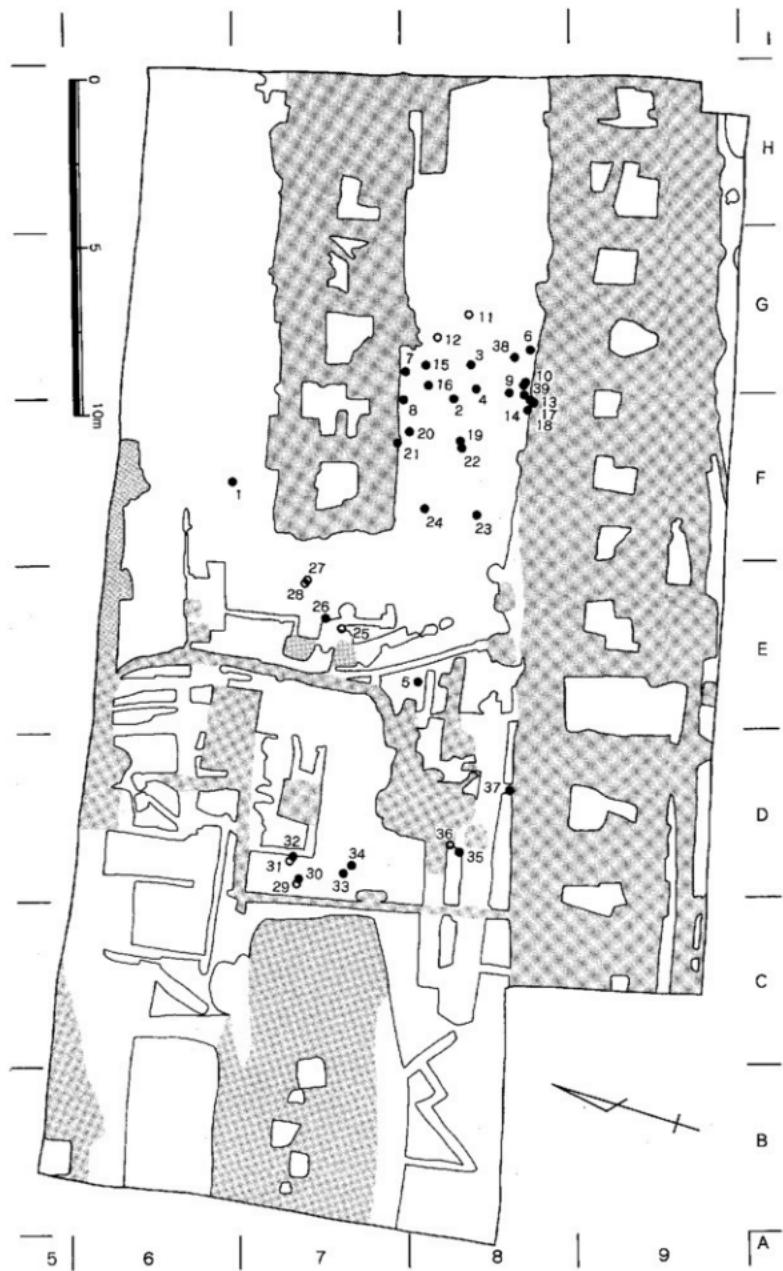


Fig. 23 石器出土位置図 (1/300)

表1 出土石器観察表

遺物番号	Fig.-No.	地区	取上番号	絶対高(m)	形 型	長さ	幅	厚さ	重さ	石材(母岩)	裏面	備考
1	28-16	F6	G-5-1	17.916	剥片	42	16	8	4.53	ob	有	
2	-	F8	G-9-1	18.235	剥片	23	15	5	2.06	ob	有	
3	25-8	G8	G-9-2	17.973	台形石器	24	23	6	1.73	ob(b)	なし	
4	-	G8	G-9-3	17.972	碎片	11	9	2	0.22	ob	有	
5	-	E8	G-14-1	18.200	碎片	4	11	3	0.19	ob	なし	
6	28-18	G8	S-4	18.239	剥片	21	22	8	3.33	ob(d)	有	
7	-	G8	S-5	18.175	剥片	27	12	3	1.09	ob	なし	
8	-	F8	S-6	18.200	剥片	23	18	6	2.58	ob(d)	有	
9	-	F8	S-7	18.278	剥片	11	21	3	0.66	ob(e)	なし	
10	28-19	G8	S-8	18.197	剥片	12	23	5	1.46	ob(d)	有	
11	25-9	G8	S-9	18.225	台形石器	30	24	6	3.86	an	有	
12	27-13	G8	S-10	18.276	剥片	20	47	9	6.11	an	有	
13	-	F8	S-11	18.017	碎片	11	11	6	0.61	ob	有	
14	25-5	F8	S-12	18.143	台形石器	30	25	6	2.68	ob	なし	
15	-	G8	S-13	18.002	碎片	11	10	2	0.28	ob	有	
16	28-20	G8	S-14	18.114	剥片	21	10	3	0.52	ob(b)	なし	
17	24-4	F8	S-21	17.989	ナイフ形石器	31	19	4	1.88	ob	なし	
18	-	F8	S-22	17.942	碎片	10	22	2	0.21	ob(b)	なし	
19	28-23	F8	S-23	18.273	石鏃	24	15	2	0.7	ob	なし	
20	-	F8	S-24	18.213	剥片	16	23	4	1.18	ob(d)	なし	
21	-	F8	S-25	18.176	碎片	5	15	4	0.33	ob(a)	なし	
22	-	F8	S-26	17.981	碎片	11	6	1	0.1	ob(b)	なし	
23	-	F8	S-27	18.388	剥片	15	13	5	0.77	ob(c)	なし	
24	24-3	F8	S-29	18.194	ナイフ形石器	42	19	9	5.24	ob	有	
25	24-1	E7	S-30	18.137	ナイフ形石器	63	22	15	16.8	an	有	
26	24-2	E7	S-31	18.168	ナイフ形石器	68	20	15	10.6	ob	有	
27	27-14	E7	S-32	18.082	剥片	24	34	7	3.23	qa	有	
28	-	E7	S-33	18.115	剥片	19	17	6	2.17	qa	有	
29	26-11	D7	S-37	18.490	削器	75	49	23	52.7	an	有	
30	26-10	D7	S-38	18.475	削器	75	42	23	47.7	ob	有	
31	27-12	D7	S-39	18.450	石核	44	59	16	59.2	an	有	
32	-	D7	S-40	18.440	剥片	14	14	5	1.3	ob	なし	
33	28-17	D7	S-69	18.210	剥片	30	23	10	3.98	ob	有	
34	28-15	D7	S-70	18.470	剥片	39	22	8	8.78	ob	有	
35	28-22	D8	S-96	18.636	細石刃	20	6	3	0.3	ob(a)	なし	
36	-	D8	S-97	18.644	剥片	26	41	6	5.49	an	なし	
37	28-21	D8	S-98	18.386	細石刃	19	7	2	0.39	ob	なし	
38	-	G8	S-109	18.076	碎片	11	12	3	0.24	ob(e)	なし	
39	25-6	G8	S-117	18.104	台形石器	33	20	7	3.28	ob	なし	
40	25-7	-	表面採集	-	台形石器	26	26	6	2.38	ob	有	
41	-	-	表面採集	-	碎片	11	20	2	0.47	ob(b)	なし	二次調整碎片

八幡遺跡群第1次、第3次調査において旧石器時代の遺物が確認されている。地表土除去後の旧地形は調査地西側を通る道路を境に北東方向と南西方向へと傾斜し、調査地は台地の尾根頂部から北東部への緩やかな斜面にあたる。最長部の南西端で標高18.6m、南東端で18.4m、北西端で18.3m、北東端で16.5mを測り、北東部の傾斜がもっとも急激である。

調査グリッドは2m×2mを基本とし、10mメッシュのグリッド名を付し、遺物の取り上げにおいても各グリッド名にておこなった。拡張部においても同様である。遺物の出土状況は面としてとらえられるものではなく、また層位的に分離できるような状況ではない。このような出土状況を示す資料のうち、やや散漫であるが台形石器3点、ナイフ形石器2点を含むG 8・F 8に集中部がみられる。G 8では11点、F 8では12点の石器がみられ、出土石器全体の56%を占める。石器の垂直分布は約45cmの幅をもっている。

2) 基本的層位と出土層

本調査地点の基本層序は表土(20~180cm)の下に部分的にクロボク状土層(約20cm)が堆積し、その下が遺構検出面である暗褐色ローム質土壤となる。遺物は基盤とされる鳥栖ロームの上層に堆積した暗褐色ローム質土壤と褐色ローム質土壤に含まれる。

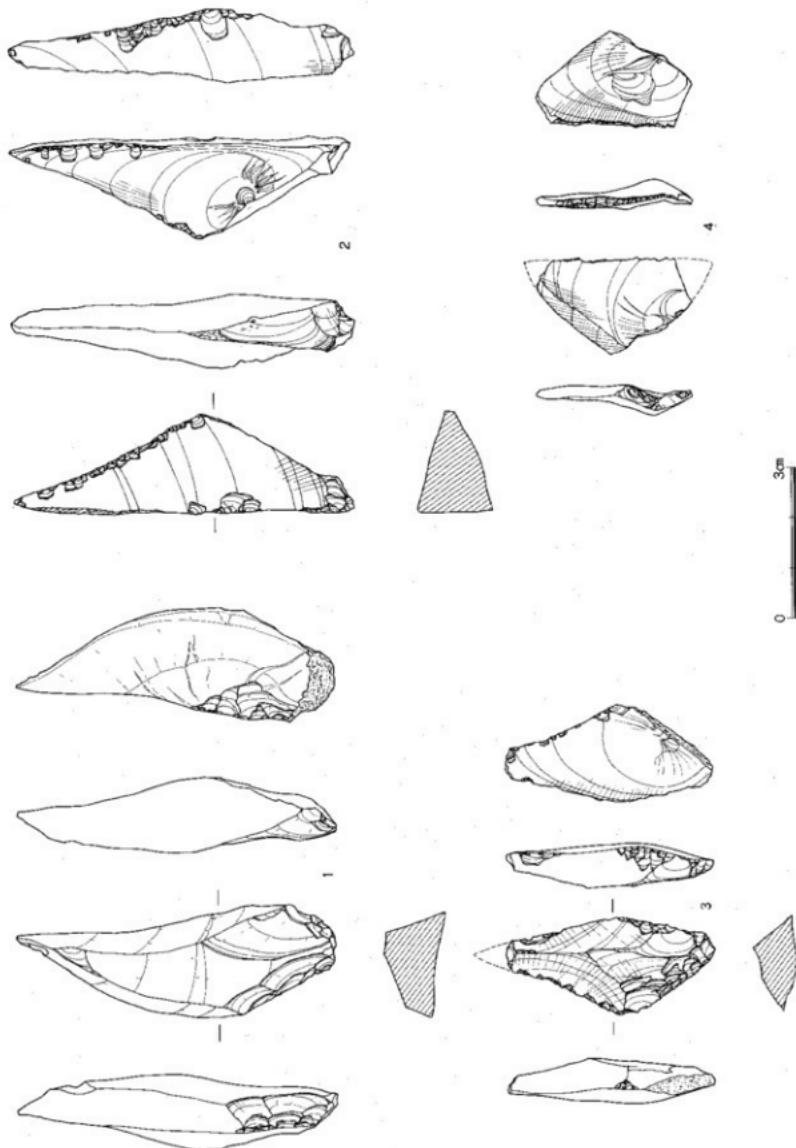
なお、ローム層の層序と石器出土層に関する自然科学分析は第4章の麦野B遺跡調査の自然科学分析の別章にまとめた。



Ph. 3 石器出土地点状況

Fig. 24 ナイフ形石器 (1 / 1)

0 3cm



3) 出土遺物

旧石器時代に属するとみられる遺物は、包含層出土遺物39点と遭撲検出時に包含層から遊離したとみられる遺物2点を加えた41点である(表1)。このほかに1点の石鎌があり、出土レベルは全体の中ではやや上位にあるものの同じ包含層から出土している。後述するように比較的古相の特徴をもつ石鎌であるものの、少量出土した細石刃に伴うものなのか、あるいは単にクラックなどにより上位層から混入したものかは判断し難い。本来ならば別章を設けるべきであるが、取りあえず本項にて報告する。

1. 遺物の種類と点数

石器の内容は、ナイフ形石器4点、台形石器5点、削器2点、剥片19点、碎片9点、石核1点、がある。なお、剥片のうち2点は細石刃である。

ナイフ形石器 (Fig.24)

1は横長の安山岩剥片を素材とし、基部に調整を施す。背面大きく三面の剥離面で構成され、左側はポジティブ面である。また、基部側に自然面を残している。左側基部のプランティングは急角度であるが、右側は浅く、主要剥離面のバルブ除去のためか、平坦剥離がある。2は分厚い黒曜石横長剥片を素材とし、基部に僅かな剥離を施す。刃部となる各所に微細剥離を見るが、調整かは不明である。主要剥離面以外の二面もポジティブ面であり、二段階の母岩分割を経た剥片剥離行程が予測できる。3は黒曜石の横長剥片を素材とし、基部に調整を施す。打面は自然面であり、基部左側の調整は、この面より背面に向かって平坦に施されている。基部右側のプランティング

は角度が緩やかである。両側辺には微細剥離が見られ、先端を欠損している。4は横長の黒曜石剥片を素材とし、右側辺に背面側からのプランティングを施している。左側基部の剥離は素材剥片の打面調整である。

以上のうち、1,2は素材、形態、製作、法量が類似する。背面にポジティブ面があり、剥離主軸が

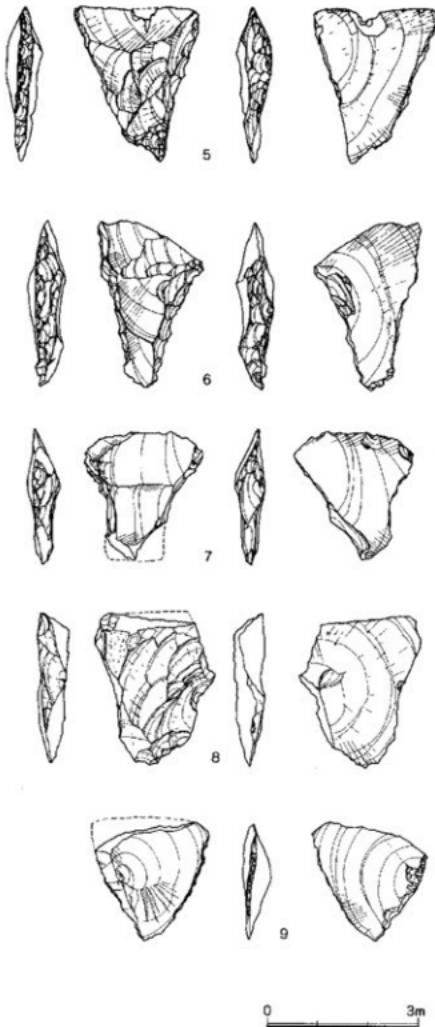
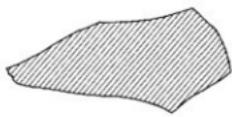
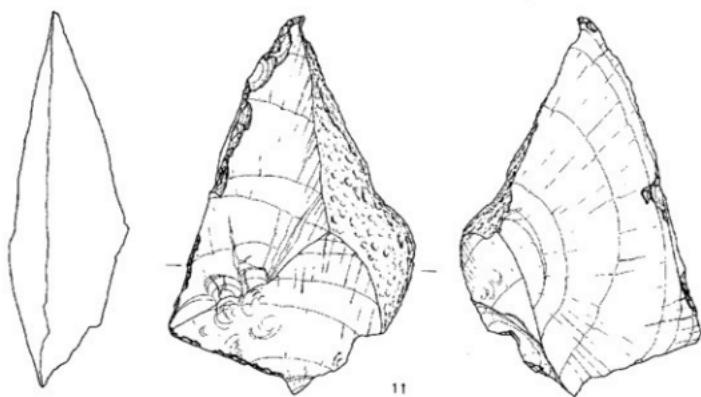
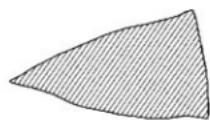
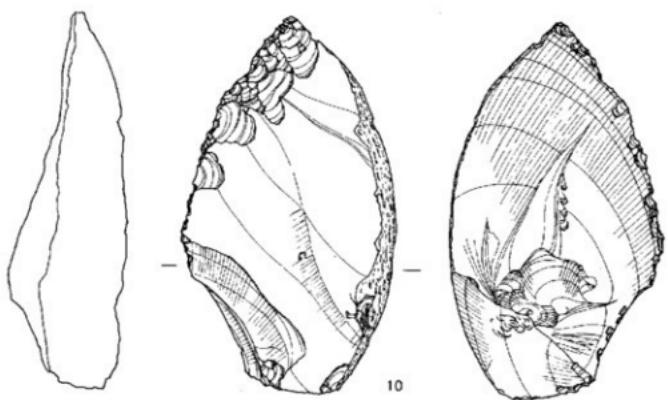
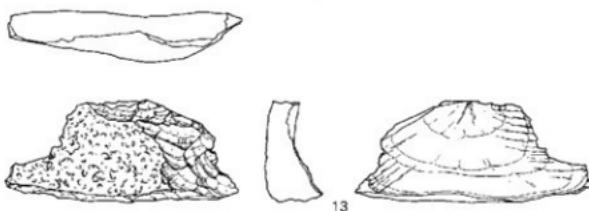
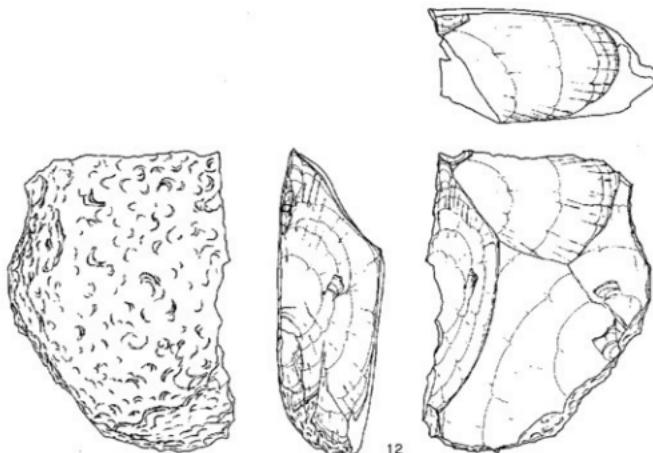


Fig. 25 台形石器 (1/1)



0 3cm

Fig. 26 削器 (1/1)



0 3cm

Fig. 27 剥片類(1)(1/1)

石器主軸とずれる特徴から、いわゆる「今緒型ナイフ形石器」に分類される。3,4はやや小型であり、素材利用に前者と共に通項があるものの幾つかの相違点があり、別型式とみる。

台形石器 (Fig. 25)

5は縦長の黒曜石剥片を素材とし両側片にブランディングを施した台形石器である。左右対称形に仕上げられ、両側辺は緩やかに内湾する。背面の右側辺からの剥離面は素材剥片のものとみられる。

6は横長の黒曜石剥片を素材とし、両側辺にブランディングを施した台形(様)石器である。刃部は

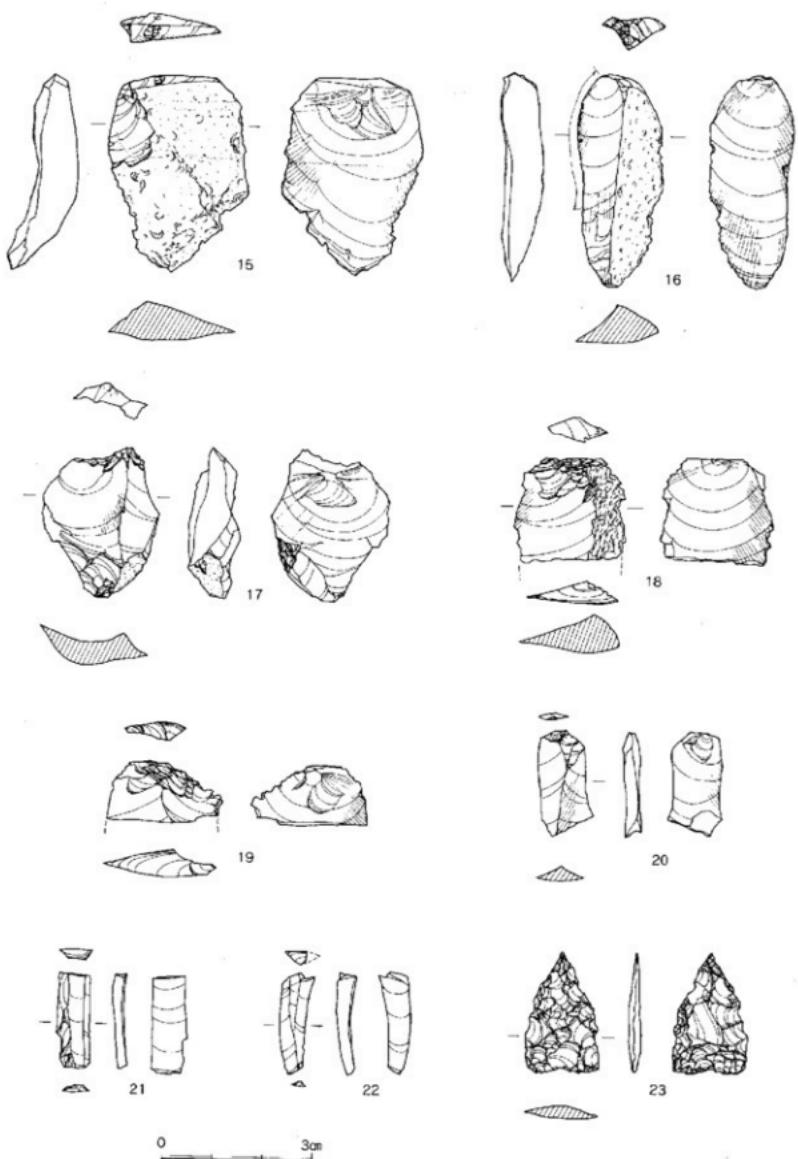


Fig. 28 剩片類(2)他(1/1)

傾斜し、切り出し型に近い形状をもつ。主要剥離面のバルブは平坦剥離で除去されている。7は縦長の黒曜石剥片を素材とし、切断後両側辺にプランディングを施した台形石器である。右側辺基部を欠損し、左側辺の両端を調査時に欠損したが、本来は「ばち」形に近い形態を呈すると見られる。8は不定形の安山岩剥片を素材とする。左側辺と基部に荒い調整を施し、台形（様）石器に仕上げている。刃部は調査時に欠損した。9は不定形の黒曜石剥片を素材とし右側辺にのみプランディングを施している。背面はポジティブ面であり、バルブがみられる。母岩分割後初期の剥片と見られる。刃部は調査時に欠損したが、平面はほぼ三角形を呈する。以上の4点は、個々に素材、形態、製作技術、法量の差がある。このうち6は「百花台型台形石器」に近い形態を呈している。

削器 (Fig. 26)

10は横長の黒曜石剥片を素材とし、一辺に調整を施し刃部としている。背面は大きなネガティブ面であり、母岩分割面とみられる。刃部は左側背面に入念に施されている。右側面は自然面のままであり、円錐の曲線がちょうど握り易い形態を呈している。11は横長の安山岩剥片を素材とし、一辺に刃部を形成している。基本的特徴は9と共通している。背面のネガティブ面にはバルブが残っている。10,11は石材の差はあるが、素材、形態、法量が極めて類似する。背面にポジティブ面があり、剥離主軸が石器主軸とずれる特徴は、別の器種である「今峰型ナイフ形石器」に類似する点を注意したい。

剥片 (Fig. 27, 28)

ここでは特徴的な8点を示した。13は横長の安山岩剥片である。背面には自然面が残り、剥離前段階の調整Fig. 離がある。打撃点は稜状をなし、本剥片が剥片剥離初段階の剥片であるのか、石核調整剥片であるのかは明らかでない。14は横長のハリ質安山岩剥片である。背面左側に自然面が残る。打撃点を新しい剥離で失っている。15は縦長の黒曜石剥片である。打面は左側方からの二面の剥離面で構成され、背面は自然面である。打面転移後初期の調整剥片とみられる。16は縦長剥片であり、15と同一石材とみられる。調整打面であり、剥離前の調整は入念に施されている。背面は二面であり、自然面と剥片剥離面で構成される。左側辺に刃こぼれ状の微細剥離がある。17は縦長の黒曜石剥片である。平坦打面であり、背面には同じ打面よりの剥離痕がある。剥片先端部に自然面があり、ここを打面とする本剥片剥離以前の調整剥離がみられる。数面の下方からの剥離痕もあり、打面転移があったことが知られる。18は縦長の黒曜石剥片である。15, 16と同一母岩と見られるが、接合しない。剥離面調整は入念であるが、打面は平坦である。剥片先端が折れている。19は縦長の黒曜石剥片である。打面、剥離面に入念な調整が見られる。打面から1cmほどで折れているが、予測される剥片形状から、台形石器等の石器製作に伴う切断の可能性がある。20は黒曜石製の小型の縦長剥片である。剥離面調整があり、打面は平坦である。幅1cm程度であるが、先行する剥離面の形状から細石刃ではなく、縦長剥片剥離面の稜線に沿った調整剥片か小剥片とみられた。

石核 (Fig. 27)

12は横長剥片石核である。安山岩の円錐素材を分割し、自然面を打面とし、剥片剥離を行っている。その際打面調整は行われていない。また、剥片剥離は分割素材の先端側から行われている。本石核から剥出された剥片は、自然面とポジティブ面が残るものと予測できる。

細石刃 (Fig. 28)

細石刃は2点検出した。この2点は何れも漆黒色黒曜石を素材としているが、ナイフ形石器の石材と一見して異なる表面の風化度合いを示し、平面的な出土位置もややずれています。21は基部と先端部を除去したものである。背面左側には石核調整剥離が5面みられる。この細石刃は細石核剥片剥離

面の左端から剥出されたと見られる。調整剝離は全て細石刃剝離面方向から入念に施されている。この点からこの細石刃はいわゆる「くさび形」細石核から剝離された可能性が強い。22は基部と先端を除去している。やや厚みがあり、先端が曲がっている。

石器 (Fig. 28)

出土した石器は完形品が1点ある。23は良質の黒曜石を素材とし、やや表面に風化が認められる。平面形は略五角形を呈し、表裏に入念な調整が施され、薄く仕上げられている。

2.石材と母岩別資料

本調査で発掘された石材は、黒曜石 (ob)、安山岩 (an)、ハリ賀安山岩 (qa) で、その点数別の割合は3:3 (80%)、6 (15%)、2 (5%) と黒曜石が圧倒的に多い。しかし、重量別で見ると113.04g (42%)、144.1g (55%)、5.4g (3%) であり、安山岩が多くなる。これは黒曜石に定型石器が11点、剝片、碎片が22点であるのに対し、安山岩は半数が定型石器であることによる。黒曜石石器が遺跡内で石器製作が予測されるのに対し、安山岩石器、剝片は完成品で搬入されたことが予測される。黒曜石のうち複数個体からなる母岩別資料は肉眼観察で以下の5群を分類した。それ以外は透明度、不純物、風化の度合い、自然面などに微妙な差があり、判断することができなかった。

母岩別資料a(ob-a)

風化面が厚く、ざらついた感を受ける。不透明で暗灰色を呈する。細石刃と碎片の計2点がある。

母岩別資料b(ab-b)

風化面は浅く、光沢が残る。半透明で不純物を含まない。約1mm幅の透明部分を含む縞状の流理が見られる。台形石器1点、剝片1点、碎片3点の合計5点がある。

母岩別資料c(ab-c)

風化面がやや厚く、光沢は鈍い。不透明で漆黒色を呈している。僅かに不純物を含み、縞状の流理がある。自然面は平滑で亜角礫状呈する。ナイフ形石器と台形石器の2点があり、断定できないが、剝片1点も類似している。

母岩別資料d(ob-d)

風化面は浅く、光沢が残る。端部では半透明となり、不純物を含まない黒色を呈する。自然面は円錐状をなし、著しい凹凸がある。剝片4点からなる。

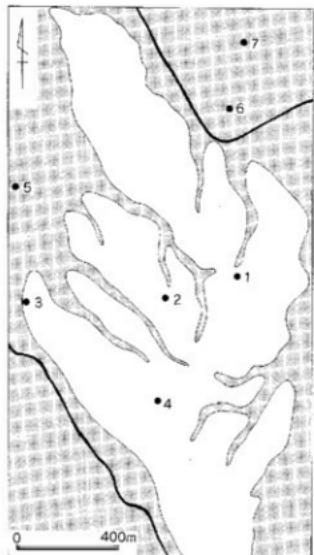


表2 麦野遺跡群と周辺出土の旧石器時代遺物

No	遺跡	次数	出土石器	石材	報告書
1	麦野C	1	削器、剝片	黒曜石、剝片	361集
2	麦野B	3	ナイフ形石器、台形石器、削器、石核、剝片、碎片他	黒曜石、安山岩 ガラス質安山岩	本報告
3	南八幡	1	剝片	黒曜石	488集
4	南八幡	3	三棱尖頭器、剝片	黒曜石	181集
5	三筑	1	削器、剝片	黒曜石、安山岩	69集
6	井相田C	1	台形石器、三棱尖頭器	黒曜石、安山岩	152集
7	井相田C	3	台形石器	黒曜石	「年報4」J1991

Fig. 29 麦野遺跡群と周辺の旧石器時代遺物出土地点 (1/20,000)

母岩別資料e(ob-e)

風化面は浅く、光沢がある。半透明で不純物を含まない。綿状の流理がみられる。剥片と碎片の計2点がある。

これらの母岩別資料の分布状況は、b、d、e群がF8、G8区に分布し、a、c群はやや広範囲に分布する。黒曜石以外のハリ質安山岩の2点はE7区にある。

石材産地については、科学的分析を待ちたいが、肉眼による限り、母岩別資料aは佐世保市淀姫塚、母岩別資料c群は伊万里市腰岳産、b,d,e群は松浦半島北部に産出する黒曜石に類似する。

3. まとめ 一 麦野B遺跡3次調査の旧石器時代石器群の評価一

本石器群は、本地域では希に包含状態がよく、少量の細石刃段階の遺物を含むものの、出土位置、深度などから区分が可能であり、比較的一括性のある石器群と見られた。石器群の主体石器となるのは「今峰型ナイフ形石器」と台形石器、削器である。剥片剥離は2種類が想定される。まず打点の偏る横長剥片を剥出するものであり、今峰型ナイフ形石器と削器の両者に共通する素材を供給するものである。石材は安山岩と黒曜石の両者があり、唯一の石核もこれに伴うものと見られる。打面は自然面か平坦打面であり、剥片の変異も大きいと見られた。次に台形石器の素材となる縦長剥片を剥離するものである。剥出される剥片は、寸詰まで幅広に近い形状であり、打面は平坦や調整があり、打面転移も行われている。本石器群の組成は比較的単純であり、出土状況や技術的面から見て同一石器群と理解する。ただし器種構成には先頭器類を含んでいないことから、欠落器種があると考えている。

さて、北部九州で「今峰型ナイフ形石器」を含む石器群は八並遺跡、那珂遺跡41次調査など多くない（菅波・小畑1995）。那珂遺跡41次地点では彫器やスクレイパーなどを伴うだけである。この石器群の時期はナイフ形石器文化後半期のなかで、終末期であると見る説と前半期に位置付けられるという二つの説がある。本石器群を介して検討するなら、「今峰型ナイフ形石器」の素材獲得手法に九州の瀬戸内技法の影響を見ることは可能である。また今回共伴した台形石器に百花台型台形石器につながる技術、形態的特徴もみられた。こうした点からこの石器群はAT降灰以降の後期旧石器文化後半期の中頃（橘・荻原1983による「後期」）に位置付けたい。

なお、本調査地点は御笠川の西岸の麦野丘陵に立地している。この丘陵は花崗岩基盤上に、段丘疊層、ASO-4火碎流堆積物、風化火山灰やレス層の順に堆積している。丘陵上部の更新世堆積物は比恵、那珂丘陵などに比べて厚く、保存状態が比較的良好。現在の標高は15~20mほどを測る。またこの丘陵は河川の浸食や雨水、湧水等の浸食によって樹枝状に開析されている。これまでに発見された旧石器時代の遺跡はなお少ない（表2）。本調査地点周辺に限ると、麦野A~C遺跡で2地点、南側の南八幡遺跡で2地点、西側の三筑遺跡で1地点、東側の井相田遺跡で2地点があり、現在合計7地点で確認されている。三筑遺跡と井相田遺跡の2地点は低位段丘上に位置している。遺跡の位置は丘陵の中央部に少なく、丘陵縁辺に多いことが注目される。これは旧石器時代遺跡の分布に共通する要素といえる。麦野丘陵の考古学的調査例はなお少ないものの、比較的更新成堆積物が厚く、旧石器時代資料の発見に今後期待される地域である。

（吉留 秀敏）

第3章 第4次調査

Iはじめに

調査に至る経緯

博多区南本町2丁目地内における地域拠点施設建設に伴う埋蔵文化財調査前審査願が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの麦野B遺跡群の西側に位置しており、南側隣接地は第3次として調査中であった。福岡市教育委員会が、これを受け1996年11月28日試掘調査を実施した。現況は宅地であり、調査の結果、表土・盛土下約20~180cmのローム層上面にて遺構が確認された。よって、面積507.85m²を対象に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1997年1月27日~同年3月31日まで行った。

調査組織

調査委託 住宅・都市整備公団

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 文化財部長 後藤直(前) 平塚克則(現)

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 小森彰

調査担当 埋蔵文化財課 加藤隆也

試掘調査 埋蔵文化財課 櫻本義嗣

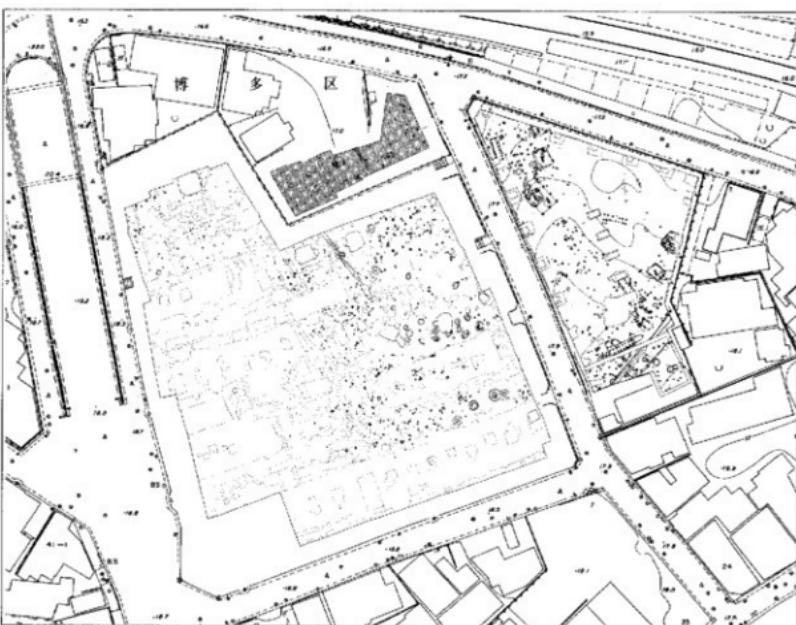


Fig. 30 第4次調査地点位置図 (1/1,000)

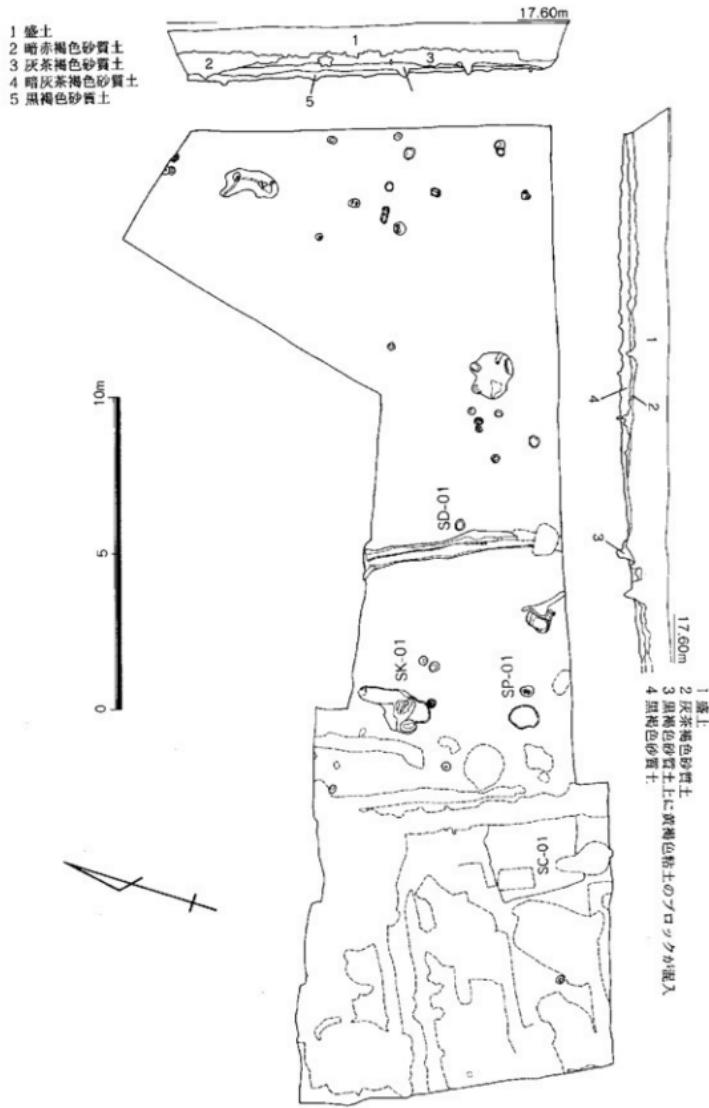


Fig. 31 第4次調査遺構配置図 (1/160)

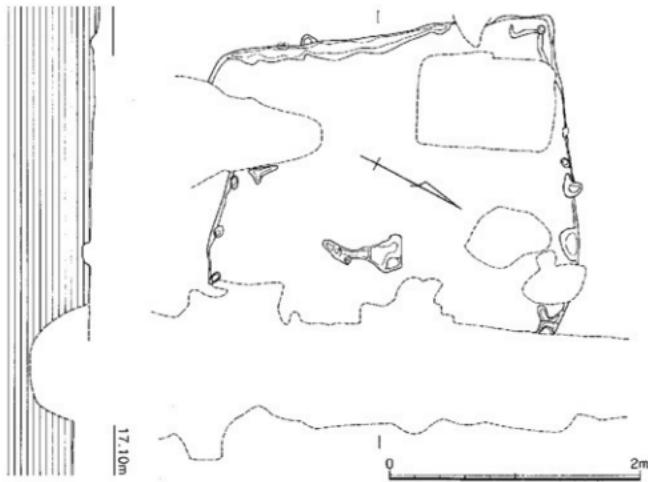


Fig. 32 SC-01 実測図 (1/40)

II 調査の記録

1 調査の概要

調査地の現況は宅地であり、南側から比べ約1m段落ちになっている。表土剥ぎは1月27日からバックホーを入れて行った。遺構は現地表面下20~180cmのローム層上面にて検出された。西側は高く擾乱が著しい、東側は低く地山の上面にはクロボク状土層、堆積層がみられる。検出遺構は堅穴住居、溝、柱穴、土坑などである。

検出した遺構は遺構ごとに01から付し、実測は南側隣接地の第3次調査と同一のグリッド割りにて行い、調査区全体に2メートル方眼をかけ20分の1で作図した。

1. 堅穴住居 (SC)

SC-01 (Fig. 32)

調査区西側にて検出した住居である。東側を擾乱溝に切られる。上部を大きく削られており、残存する深さは良好な部分で約3cm程度である。一边2.9mを測り、ほぼ方形を呈すると思われ、壁際には10~15cmの溝が部分的にみられる。方向は3次調査でみられる住居址と比較してやや西に振る。白色粘土の散在や焚口のへこみはみられずカマドの位置は不明である。出土遺物は小破片を含めみられなかった。

2. 溝 (S D)

S D - 0 1

調査区はほぼ中央に位置する。幅50cm深さ30cmを測り、断面はU字形を呈する。方位はN-27°-Wをとる。溝の方向はローム層の等高線と平行し、谷の方向と同じくする。3次調査側にもこの溝とはほぼ平行する溝がみられ、緩やかな斜面に直行して数本の溝が掘られていたことが予想される。そして、この溝がもっとも谷よりのものである。出土遺物は須恵器壺蓋口縁部の小破片、土師器の小破片があり、図化できるものはない。

3. 土坑 (S K)

調査区内にはいくつかの土坑状遺構がみられるが、谷の内部のものは植物の根などによるもののが多かった。遺物が出土したものはSK-01のみであった。

S K - 0 1

調査区西側にて検出した。平面は不定形を呈し、深さは25cmを測る。覆土は黒灰褐色粘質土であった。遺物は須恵器の甕胴部破片、土師器の小破片が出土している。図化できるものは出土していない。

4. 柱穴 (S P)

調査区内には複数の溝と同じ埋土をもつ柱穴がみられたが、調査範囲と著しい搅乱のため建物の復元はできなかった。遺物が出土したSP-01のみを取り上げる。

S P - 0 1

竪穴住居と溝の間に位置し、黒褐色の埋土をもつ、平面は梢円形を呈し、長軸40cm、短軸35cm、深さ25cmを測る。出土遺物は土師器の甕口縁部を含む破片が7点出土している。小破片のため図化できるものはない。ただし、竪穴住居よりさらに谷よりに建物があった可能性を示すものと考えられる。

5. まとめ

今回の調査において8世紀後半頃と思われる竪穴住居と溝がみつかった。竪穴住居は南側に広がる集落に含まれるものと思われ、集落の居住域が谷部の際にまで広がっていることが確認された。また、溝をもって居住域と画する谷部の植物珪酸体分析により、谷部で稻作が行われていた可能性は低いという結果を得た。近隣の南八幡遺跡、麦野A、C遺跡、雜賀隈遺跡に散在する同時期の集落構成員数を考えると畠作以外の生産域を離れた場所にもっていたか、または集落が食物生産とはまったく異なる発生原因をもっていた可能性も考えておかなくてはならない。

第4章 麦野B遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

第四紀に活発な活動を行っている火山の北西に位置する福岡平野は、砂丘砂層などを除けば、考古遺跡に関する更新世後期以降のテフラの産状はそれほど明瞭ではない（例えば下山, 1989）。福岡平野の台地上に位置する麦野B遺跡でも、台地表層の褐色土壤層中よりナイフ形石器などの遺物が検出されたが、旧石器時代の編年における指標の一つとなっている姶良T_n火山灰（AT：町田・新井, 1976）の降灰層準は確認されていない。おそらく、土壤層中に拡散・混交していると予想される。ここでは、分析によりATの産状を調べ、その降灰層準を推定し、石器の時期について検討する。また、ATの産状と同時に土壤層中に含まれる重鉱物組成の層位の変化から、土壤層の形成についても考える。

また、8世紀の住居跡の確認面を切っている谷を埋積する黒ボク土層および住居と同時期と考えられる溝の覆土の分析により、当該期頃の環境推定を行う。

さらに、検出された時期不明の土坑SK-08について、覆土の分析により、その時期に関する情報の獲得を試みる。

I. 調査区におけるローム層の層序と石器出土層準

(1) 調査区周辺の地形・地質概観

福岡平野周辺の地形・地質については、唐木田ほか（1994）に詳しい。ここでは、これに従って概説する。

調査区の位置する台地は、福岡平野の南側に分布する河成段丘である下白水台地の東縁部に相当する。下白水台地の大部分は、須玖面に区分され、有明海沿岸地域の中位段丘下位面に対比されている。麦野遺跡の位置する平坦面も須玖面である。須玖面を構成する地層は、阿蘇-4火砕流堆積物および砂礫層である須崎層である。阿蘇-4火砕流の噴出年代は7～9万年前とされている（町田・新井, 1992）から、これが須玖面の形成年代といえる。

須玖面の台地表層の土壤層は、一般に色調の変化で区別されており、上部の褐色火山灰層は鳥栖ローム層、下部の白色粘土層は八女粘土層と呼ばれている。これらの層は、その名前からわかるように、それぞれの模式地域で認識された層を福岡地域の層に対比したものである。しかし、模式地における層と必ずしも成因的に同じものとは考えられないとして、福岡地域における鳥栖ローム層および八女粘土層の呼称は、適切でないと考えられている。本文では、調査区における土層の呼称として鳥栖ローム層および八女粘土層を用いるが、成因については分析結果を踏まえて後述する。

(2) 試料

今回のローム層層序の分析対象として試料を採取した地点を1地点とする。1地点では、8世紀の遺構確認面より下位の厚さ約60cmの土壤断面が作成された。断面の最上部の10cmは、暗褐色を呈するローム層であり、その下位に厚さ約27cmの褐色のローム層と厚さ約30cmの黄褐色ローム層が観察された。層位的な色調の変化は漸移的であり、また黄褐色ローム層はいわゆるソフトNo.状態を

呈する。石器の出土層準の下限は、褐色ローム層と黄褐色ローム層の境界付近である。

試料は、断面の最上部から厚さ2.5cmで連続に試料番号1～26まで26点が採取された。土層断面の柱状図と試料の採取層位を分析結果を示した図1に併記する。

(3) 分析方法

冒頭で述べたようにここでは、重鉱物分析と火山ガラスの産状を調べる火山ガラス比分析を行う。ローム層の重鉱物組成は、ローム層を形成した母材の状況を反映しており、その層位的变化は、土壤形成環境の变化を示唆していると考えられる。以下に処理過程を示す。

a) 重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタンゲステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

b) 火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒を計数し、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉱物にいれ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

(4) 結果

a) 重鉱物分析

どの層位においても斜方輝石、角閃石、不透明鉱物の3鉱物を主体とし、少量の酸化角閃石を伴う組成である。試料によっては微量の单斜輝石を伴う。主要3鉱物（以下単に3鉱物とする）の量比は、層位によって若干異なる。最も下位の黄褐色ローム層の下部の試料番号26～23では、不透明鉱物が最も多く、次に斜方輝石、角閃石の順に多い。黄褐色ローム層の中～上部から褐色ローム層の下部（試料番号22～13）では、やはり不透明鉱物が最も多いが、斜方輝石よりも角閃石の方が多くなる（ただし試料番号20を除く）。その上位の褐色ローム層の中～上部（試料番号12～8）では、3鉱物がほぼ同量程度の組成と斜方輝石が少量になる組成とが層位的に交互に出現する層位であり、褐色ローム層の上部から暗褐色ローム層の最下部にかけて（試料番号7～4）は3鉱物は同量程度、暗褐色ローム層の中部（試料番号3）で斜方輝石が少なくなり、その上位の暗褐色ローム層上部（試料番号2、1）では斜方輝石がやや多い組成になる。

b) 火山ガラス比

バブル型火山ガラスの層位的な量比の変化が認められ、他の形態の火山ガラスは試料によっては微量含まれる程度である。バブル型火山ガラスは、無色透明であり、暗褐色ローム層および褐色ローム層に比較的多く含まれ、黄褐色ローム層では下位ほど少くなり、試料番号24以下ではほとんど含まれない。火山ガラスの多い層準の中では明瞭な濃集層準ではなく、また下位の黄褐色ローム層に向かっての火山ガラスの減少も漸移的である。

表1 1地点の重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料番号	斜方輝石	斜方輝石	角閃石	角閃石	カルサイト	ジルコニア	レザーカラム	不透明鉱物	その他	合計		バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	火山ガラス	その他	合計	
										1	2							
1	81	1	74	3	0	0	0	70	21	250	46	1	4	199	250			
2	88	0	69	4	0	0	0	74	15	250	61	0	4	185	250			
3	43	2	83	9	0	1	0	93	19	250	59	1	1	189	250			
4	71	4	70	3	0	1	0	72	19	250	41	1	5	203	250			
5	67	4	78	3	0	0	0	63	35	250	55	0	5	190	250			
6	59	1	65	5	0	0	0	97	23	250	48	0	2	200	250			
7	75	0	82	3	0	0	0	66	24	250	55	4	2	189	250			
8	65	2	70	5	0	0	0	90	18	250	48	0	2	200	250			
9	34	0	80	7	0	0	0	97	32	250	55	2	2	191	250			
10	77	0	64	3	0	0	0	76	30	250	39	4	1	206	250			
11	34	3	69	7	0	0	0	111	26	250	36	1	1	212	250			
12	65	0	71	10	0	0	0	88	16	250	39	8	0	203	250			
13	41	0	75	14	0	0	0	90	30	250	34	3	3	210	250			
14	37	0	88	10	0	0	0	1	88	24	250	22	2	0	226	250		
15	37	0	85	13	0	0	0	91	24	250	16	1	0	233	250			
16	51	1	74	6	0	0	0	97	21	250	19	0	0	231	250			
17	45	2	101	20	0	0	0	55	27	250	7	0	1	242	250			
18	42	0	78	18	0	0	0	91	21	250	15	0	1	234	250			
19	45	0	65	23	0	0	0	92	25	250	14	0	0	236	250			
20	61	0	43	9	0	0	0	114	23	250	12	0	0	238	250			
21	45	1	70	7	0	0	0	97	30	250	10	0	1	239	250			
22	47	3	62	5	0	0	0	97	35	250	4	0	1	246	250			
23	62	2	50	7	1	0	0	101	27	250	4	0	1	245	250			
24	59	4	47	8	0	0	0	107	25	250	2	0	0	248	250			
25	68	0	15	10	0	0	0	135	22	250	0	0	0	250	250			
26	70	6	46	9	0	0	0	97	22	250	3	1	0	246	250			

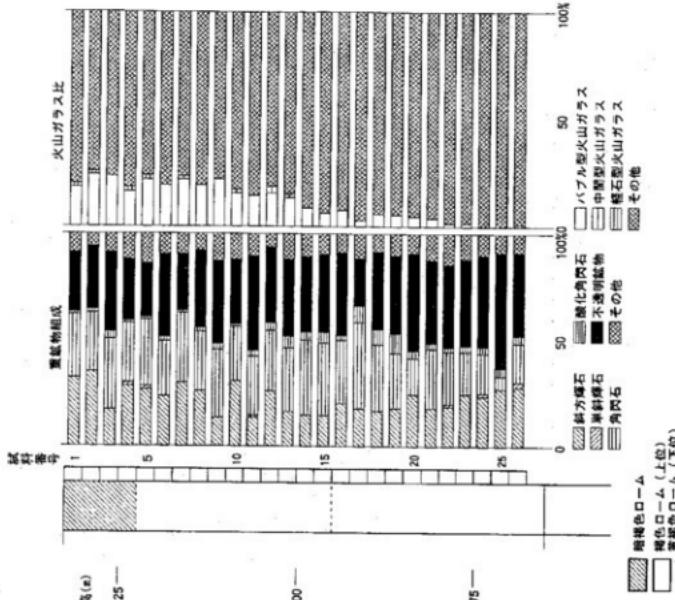


図1 1地点の重鉱物組成および火山ガラス比

以上 a)、b) の結果を表1、図1に示す。

(5) 考察

広域テフラ As 0・4 として知られている阿蘇-4 火碎流噴出に伴い発生した火山灰は細粒のバブル型火山ガラスにより構成されるが、今回検出したローム層中の火山ガラスは、下位に向かって減少することから阿蘇-4 火碎流には由来しない。また、下山ほか(1989)により福岡周辺の土壤層中から検出されている約6300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-A h:町田・新井, 1978)もバブル型火山ガラスから構成されるが、今回の火山ガラス中には、K-A hの特徴である褐色を帯びた火山ガラスがほとんど認められることから、たとえ混交していたとしてもごく微量であると考えられる。したがって、1地点の暗褐色ローム層から褐色ローム層にかけて多量に認められた火山ガラスは、その色調と形態および産出層位から、ATに由来すると考えられる。

さて一般に、土壤中に特定のテフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多いといわれている(早津, 1988)が、今回のように最濃集部が明瞭でない場合は降灰層準を明確に指摘することができない。そこで降灰層準の可能性が高い層準を示すならば、火山ガラスの下位に向かっての減少が始まる試料番号12付近すなわち褐色ローム層下部であるといえる。石器の出土層準の下限は褐色ローム層と黄褐色ローム層との境付近とされているから、今回のATの降灰層準はそれよりも若干上位にあるといえる。ただし、以下述べるローム層が形成された状況を考慮すると、出土層準下限の石器の時期とAT降灰の時期はほぼ同時期と考えた方が良い。

ところで、今回の分析により検出されたローム層中の重鉱物は、その組成から多くは台地構成層である阿蘇-4 火碎流堆積物に由来すると考えられる。特に、今回認められた角閃石の中に、As 0・4 テフラの特徴とされている褐色の角閃石(町田・新井, 1992)が比較的多いこと(酸化角閃石として同定したものもある)などは、それを支持している。一方で、10cm程度の垂直的な幅で重鉱物組成が系統的に変化していることとATの火山ガラスの産状からは、今回対象としたローム層が、阿蘇-4 火碎流堆積物の上部がそのまま風化したものではなく、阿蘇-4 火碎流堆積物の上面に周辺の砂塵(おそらく阿蘇-4 堆積物の風化碎屑物を主体とする)からなる碎屑物が堆積し、これを母材としてローム層が形成されたのではないだろうか。ATの火山ガラスの産状は、AT降灰後もその再堆積が繰り返されたことを示唆し、また重鉱物組成の変化は砂塵が堆積する時の状況(砂塵の給源や砂塵を運んだ風向風力など)の変化を表しているといえる。おそらく、この状況の変化は、台地単位程度の広がりにおいては共通すると考えられるので、今後例えば下白水台地内のローム層の層序対比に重鉱物組成を指標として使える可能性がある。その際には、今回の結果からみて、5cm厚程度で試料を連続採取することが適当であると考えられる。

II. 8世紀頃の植生および谷内の古環境について

(1) 試料

調査は、谷内の3地点と谷斜面に構築された溝内の4地点の2カ所の地点の堆積物について実施した。3地点の谷は八女粘土層まで浸食しており、黒ボク土によって埋没している。八女粘土層と黒ボク土との境界は漸移している。4地点の溝は、馬栖ローム層下部から八女粘土層までを掘り込んで構築されている。溝内は黒ボク土によって埋没している。

試料は、各地点の土層断面から層位試料として採取し、3地点では八女粘土層1点（試料番号8）、黒ボク土3点（試料番号1・3・5）、4地点では溝埋植物2点（試料番号2・4）を選択し、分析に使用した。

（2）分析方法

対象とする試料が黒ボク土であることから、ここでは植物珪酸体分析を行う。以下に処理過程を述べる。

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250kHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュラックスで封入しプレーラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

（3）結果

結果を表2、図2・3に示す。植物珪酸体は検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が見られるものが多い。

3地点では、八女粘土層および谷埋植物の黒ボク土で同様な組成が見られる。すなわち、タケ亜科が優占し、ウシクサ族（スキ属を含む）やイチゴツナギ亜科などが認められる。なお、試料番号1では栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体もわずかに認められる。

4地点でも、3地点と同様に、タケ亜科が優占する組成が見られる。また、各試料からイネ属も認められる。

（4）考察

八女粘土層および谷埋植物の黒ボク土では、いずれも植物珪酸体の保存状態が悪く、タケ亜科が優占する組成を示した。タケ亜科の植物珪酸体は、他のイネ科植物に比較して風化に強く、生産量の多いことが既往の研究から指摘されている（近藤、1982；杉山・藤原、1986）。このことから、今回の結果におけるタケ亜科は、実際の植生に比較して過大に評価されていることが推定される。

また、谷埋植物と谷斜面に構築された溝埋植物中の植物珪酸体の組成が一致していたことや、今回のような谷部で多産する場合が多いヨシ属の植物珪酸体がほとんど検出されなかつたことなどから、谷埋植物は台地上などからの流れ込んだ堆積物である可能性が強い。したがって、谷および溝埋植物中の植物珪酸体組成は、谷斜面や台地上の植生を強く反映しているものと考えられる。台地上には、タケ亜科やウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が分布していたものと考えられる。また、谷内は湿润な場所に生育するヨシ属がほとんど認められなかつたことから、湿润な場所ではなかつたあるいは湿地であったとしても堆積速度の早い谷であった可能性がある。

栽培植物のイネ属は、谷内の黒ボク土上部（試料番号1）、溝埋植物下部・中上部で認められた。このことは、これら堆積物の埋積期に谷斜面あるいは谷内で稲作が行われていたことを示唆する。ただし、出現率は低率であったことから、調査地点で稲作が行われていたとしても、その期間は短かったものと考えるべきであろう。

表2 3・4地点およびSK08の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	3地点				4地点		SK08	
		1	3	5	8	2	4	1	2
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属	1	-	-	-	-	3	6	-	-
キビ族	1	2	-	-	-	3	3	-	-
タケ亜科ネザサ節	5	3	2	-	-	-	5	-	-
タケ亜科	194	236	198	169	236	173	21	2	
ウシクサ族ススキ属	1	5	4	4	3	2	-	-	-
イチゴツナギ亜科	-	1	-	1	12	7	-	-	-
不明キビ型	14	13	4	18	12	16	1	-	-
不明ヒゲンシバ型	-	-	-	2	1	1	-	-	-
不明ダンチク型	3	2	-	9	1	1	1	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属	-	-	-	-	2	2	-	-	-
タケ亜科ネザサ節	2	4	2	-	1	-	-	-	-
タケ亜科	80	88	84	62	72	83	6	1	
ヨシ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ウシクサ族	4	4	8	23	11	8	-	-	-
シバ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-
不明	22	14	10	21	23	13	2	-	-
合計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	219	262	208	203	271	214	23	2	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	108	110	104	106	111	106	8	1	
総計	327	372	312	309	382	320	31	3	
組織片									
イネ属短細胞列	-	-	-	-	1	2	-	-	-

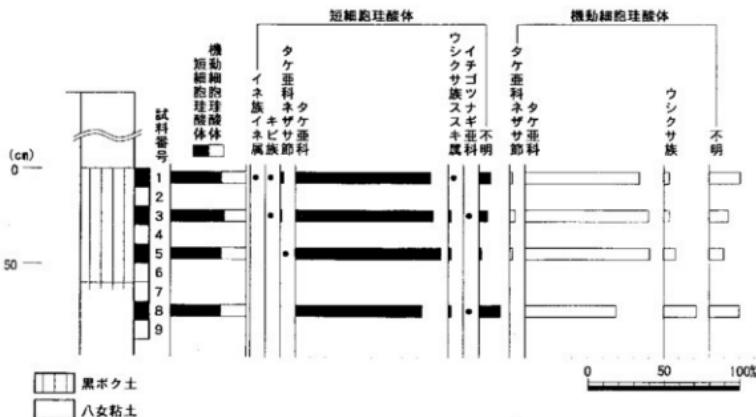


図2 3地点の植物珪酸体組成
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。
なお、●は1%未満の種類を示す。

III. SK-08の時期について

(1) 試料

SK-08は隅丸方形を呈し、壁がほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央部にいくつかの掘り込みが見られる。試料は、中央部の2ヶ所の掘り込み底部から2点（試料番号1、2）が採取された。

(2) 分析方法

時期の情報として、覆土中に含まれる指標テフラの検出を試みる。また、植物珪酸体分析も行い、前述の8世紀頃の組成との比較からも時代性を考える。以下に処理過程を述べる。

a) テフラ分析

試料は、適量を蒸発皿に取り、泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂を实体顕微鏡下で観察、スコリア・軽石・火山ガラスの特徴や含まれる量の多少を定性的に調べる。

b) 植物珪酸体分析

前述の通りである。

(3) 結果

a) テフラ分析

火山ガラスが、試料番号1に少量、試料番号2に微量認められた。火山ガラスは褐色を帯びたバブル型を呈する。

b) 植物珪酸体分析

タケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。

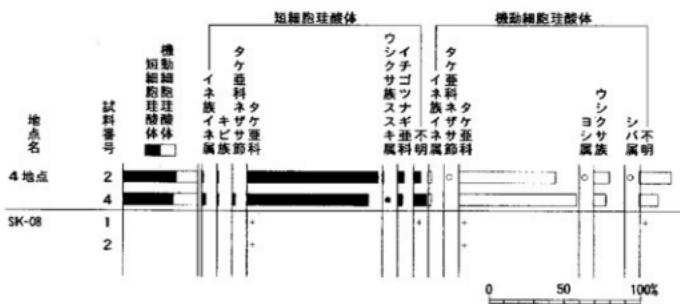


図3 4地点およびSK-08の植物珪酸体組成

出率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉部機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉部機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

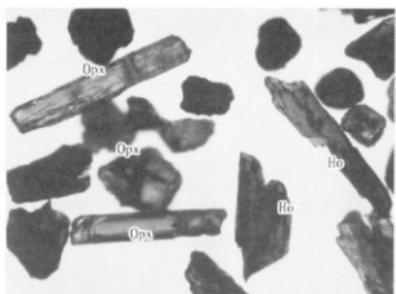
(4) 考察

検出された火山ガラスは、その色調と形態からK-A hに由来すると考えられる。含まれる量が少ないことから、土坑周辺の黒ボク土が流れ込んだ際に覆土中に混交した可能性がある。そうであるとすれば、土坑の構築はK-A h降灰以降である可能性の方が高いといえる。なお、植物珪酸体組成の比較による年代の検討は困難であった。

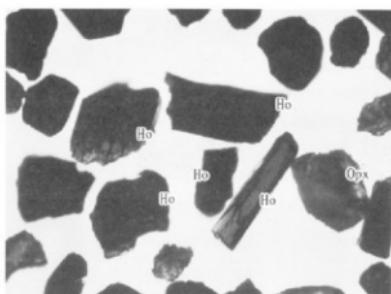
引用文献

- 早津賢治（1988）テフラおよびテフラ性土壤の堆積機構とテフロクロノロジー—ATにまつわる議論に關して—、考古学研究, 34, p.18-32.
- 唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々和一豊（1994）福岡地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅），192p., 地質調査所。
- 近藤鍊三（1982）Plant opal分析による黑色腐植層の成因究明に関する研究、昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書, 32p.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究, 25, p.31-64.
- 町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義—、科学, 46, p.339-347.
- 町田洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰、第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、276p., 東京大学出版会。
- 下山正一・溝田智俊・新井房夫（1989）福岡平野周辺で確認された広域テフラについて、第四紀研究, 28, p.199-205.
- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亞科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—、考古学と自然科学, 19, p.69-84.

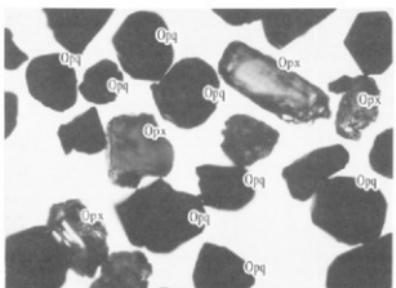
図版 I 重鉱物・火山ガラス



1. 重鉱物(1地点;1)



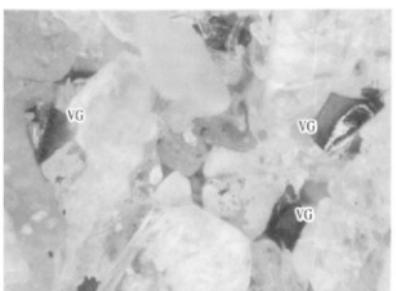
2. 重鉱物(1地点;17)



3. 重鉱物(1地点;25)



4. ATの火山ガラス(1地点;9)

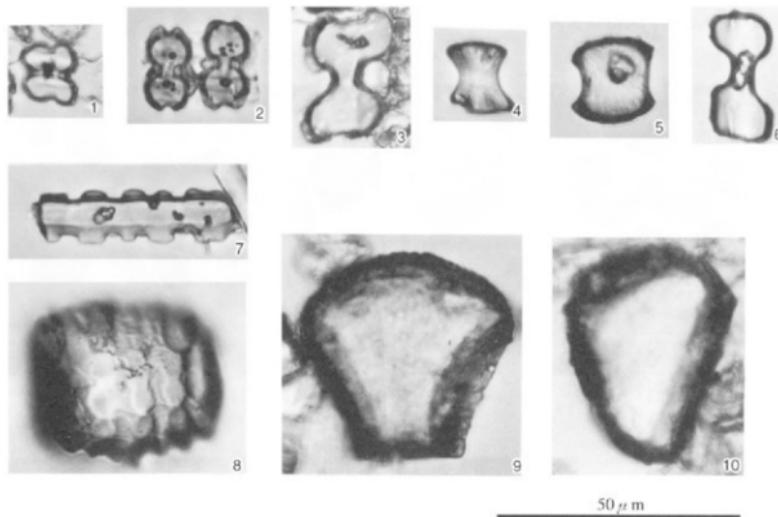


3. K-Ahの火山ガラス(SK-08; 1)

0.5mm (1-4) 0.5mm (5)

Opx:斜方輝石, Ho:角閃石, Opq:不透明鉱物, VG:火山ガラス.

図版 2 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体(4地点;2)
2. イネ属短細胞列(4地点;4)
3. キビ属短細胞珪酸体(4地点;4)
4. ノザサ属短細胞珪酸体(3地点;3)
5. タケ亜科短細胞珪酸体(3地点;1)
6. ススキ属短細胞珪酸体(3地点;3)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(3地点;3)
8. イネ属機動細胞珪酸体(4地点;2)
9. タケ亜科機動細胞珪酸体(3地点;1)
10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(3地点;1)

図 版

PLATES



(1) 麦野B遺跡群第3次調査区北半全景（南から）



(2) 麦野B遺跡群第3次調査区南半全景（北から）



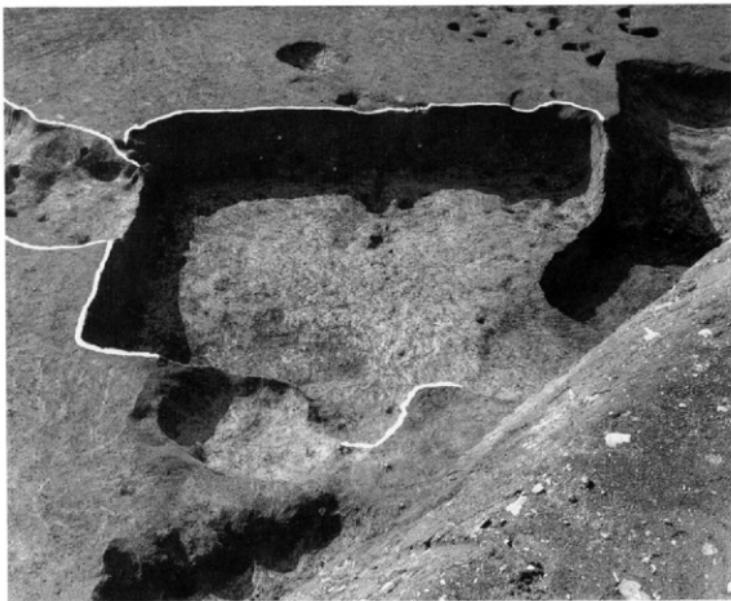
(1) SC-01 (西から)



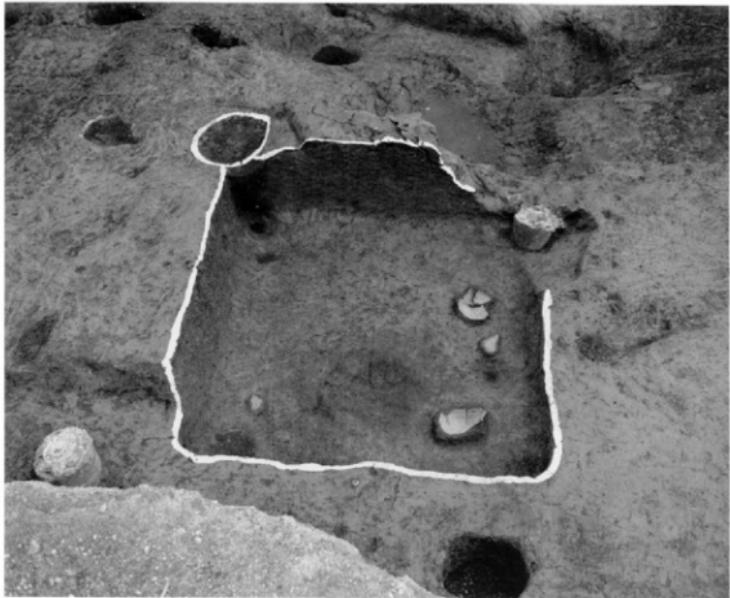
(2) SC-02 (東から)



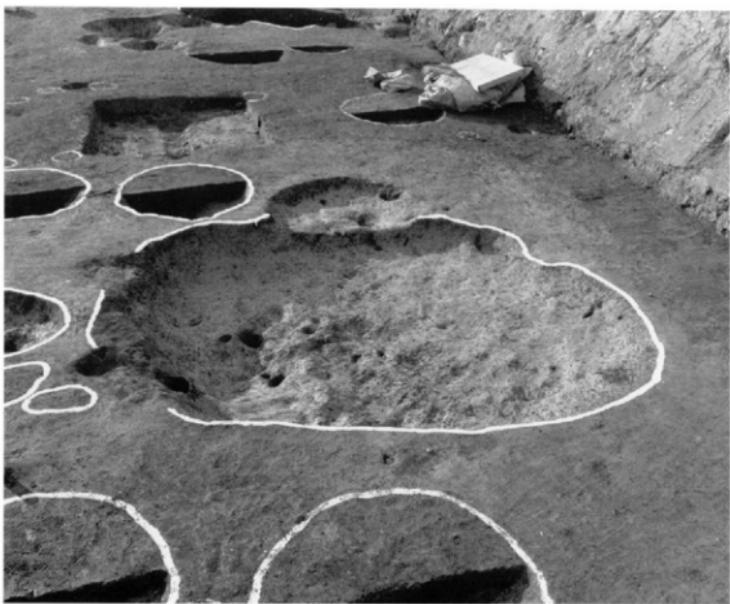
(1) SC-03 (東から)



(2) SC-04 (北東から)



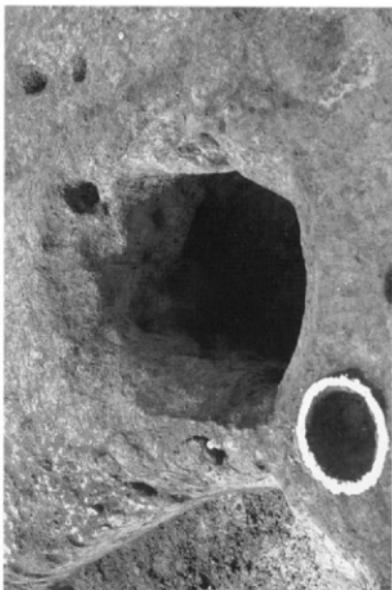
(1) SC-05 (北東から)



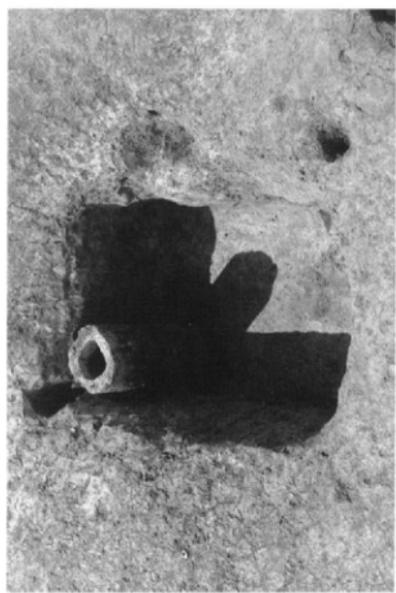
(2) SK-11 (東から)



(2) SK-08 (北から)



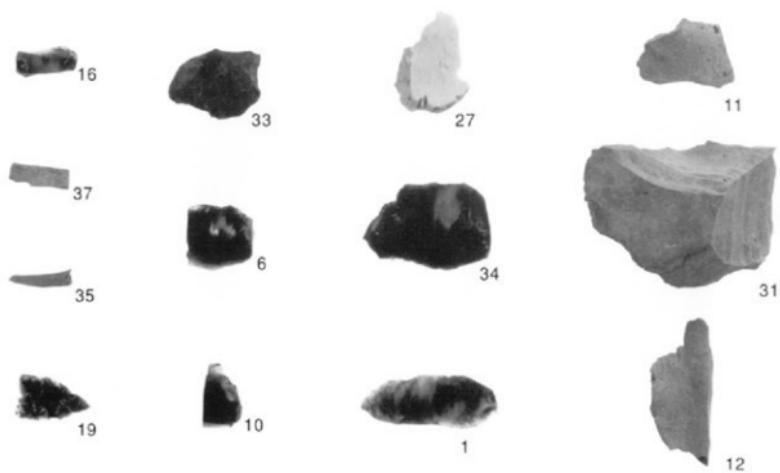
(4) SK-04 (南西から)



(1) SK-03 (北東から)



(3) SK-07 (北から)



遺物番号に対応



麦野B遺跡群第3次調査出土石器 1



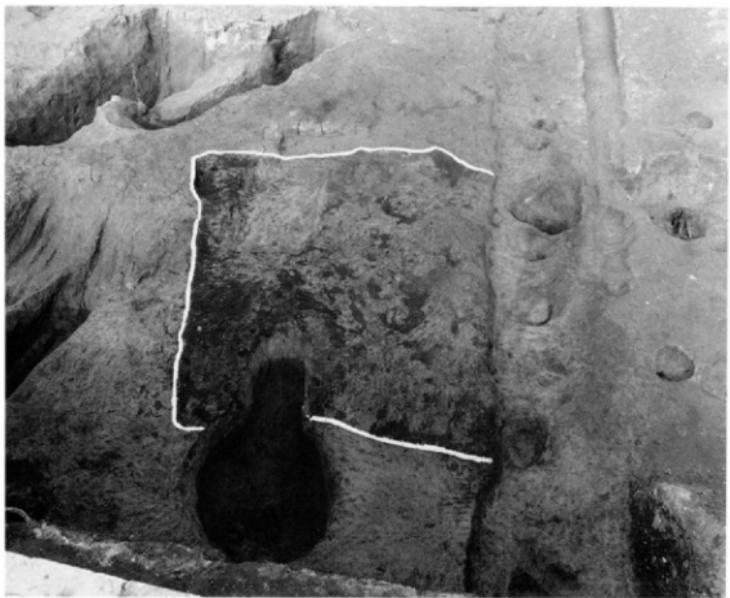
遺物番号に対応



麦野B遺跡群第3次調査出土石器 2



(1) 麦野B遺跡第4次調査区全景（南から）



(2) SC-01 完掘状況（南から）

麦野B遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第568集

平成10年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 末松印刷株式会社

福岡市博多区東那珂2丁目4-36